

J2.99:17

17 of 20

June 1945
Vol. 3, no. 6

67/14
C

ポストン

文藝

六月号

ポストン文藝 六月號 目次

表紙

進藤舟水

寫眞

(Calinness) 静寂、朝まだき、
山は招く、小さいお城、
雨の前、鉄樹の花、
親鳥を待つ、
白い馬、
窓際の葵

巻頭言

浦路と勤須磨

翠川 敏 三

随筆を語る

谷川江浦草 二

緑蔭に綴る

外川 明 五

錯意あれば

眞澄 丘 九

誠意あれば

猿渡則子 三

安倍仲磨

千崎如幻 六

ポストン生活印象

貴家よま子 八

寶石の会話

新関惣太郎 三

野遊の会話

有田 百 六

僕の雑記帖

松原信雄 四

輸生活断章

青木 伸 二

釣つてゐるAさん

片井溪巖子 三

工廠の隅から

木内春波 四

私の犬

マイ・シエウイ 五

閑の輪

中村千代子 六

三輪の穂

常石芝青 七

夏の雑詠

大月喜三郎 八

満座那吟社句抄

木内春波 九

卯月歌會集

鮑山拔華 十

選並添削

吉里・島本 十一

紙上互選

永瀬 勇 十二

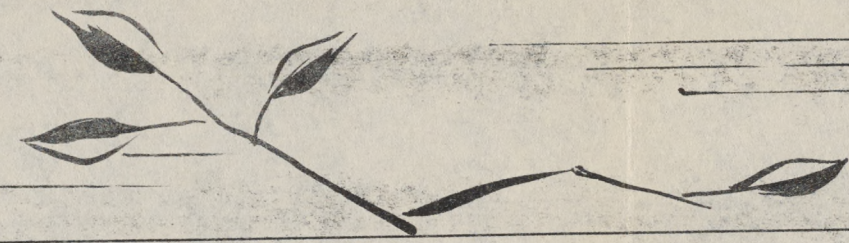
創作

白百合
A子の轉住

島原潮風 23
有田 百 31
羽根政春 39

編輯後記
原カッ
板ト

進藤舟水 46
瀧井謹平





Calmness



きたま朝



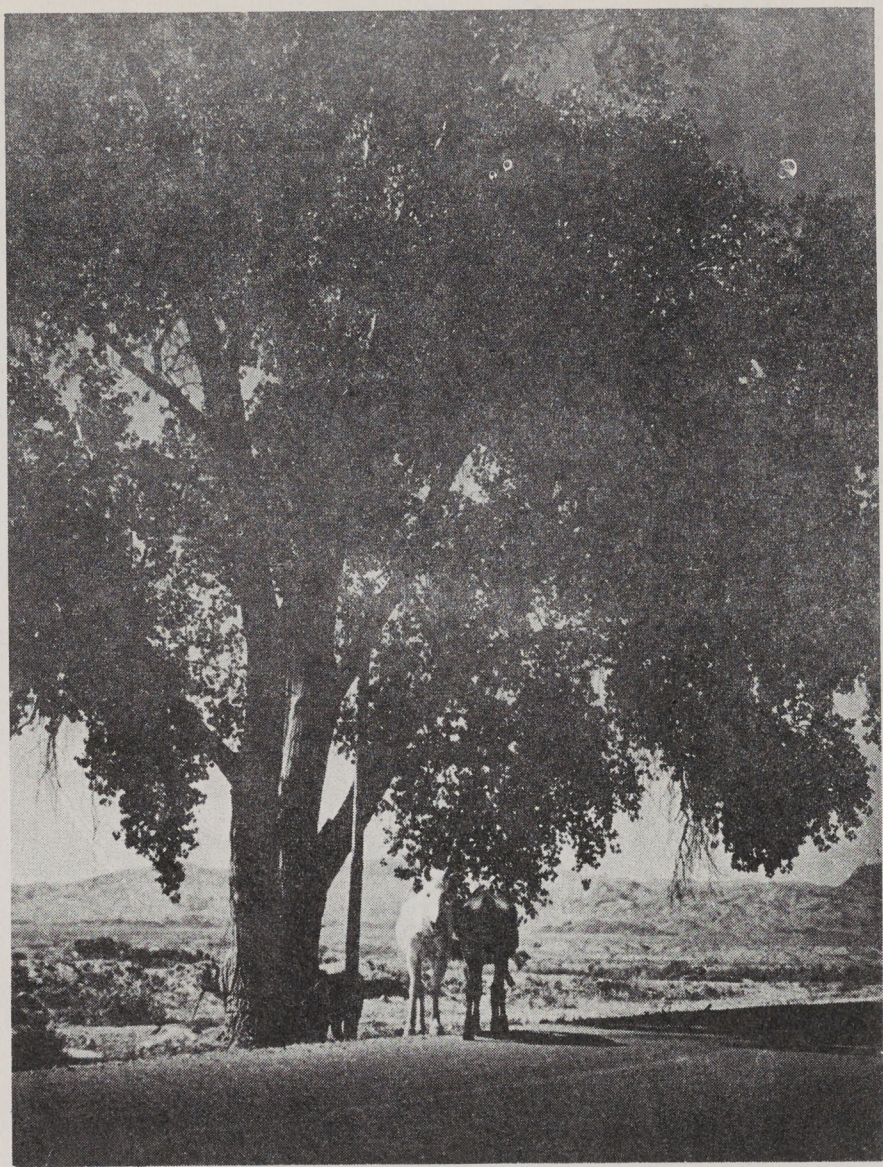
つ待と鳥親



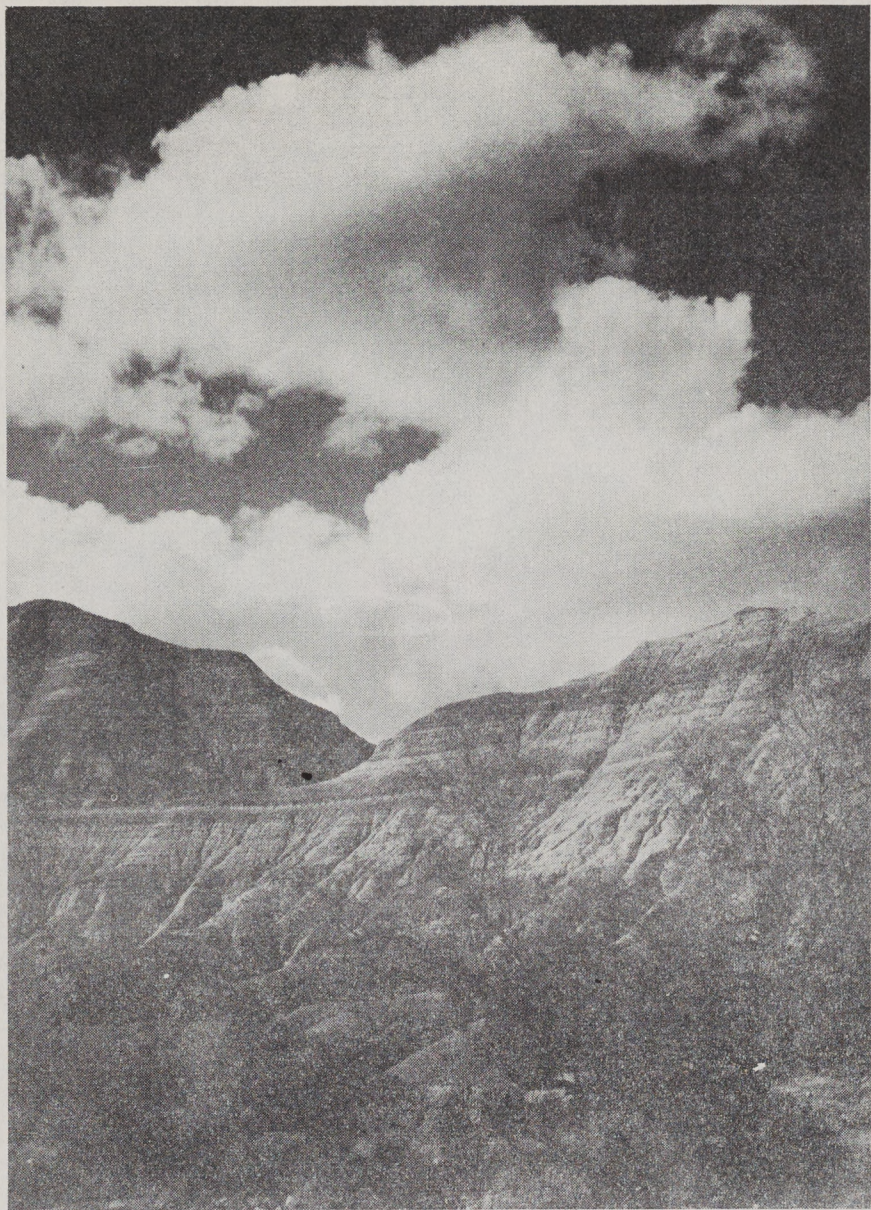
山王招く



城 不 二 十 一



馬 白



雨の 前



花の樹欽



葵の窓際

卷 頭 言

凡ゆる生命は愛に由つて生れ、愛に依つて発展し愛に依つて完成する。愛を描いて生命はない。愛は生命の本質であり、生活の原理である。

愛あるところ、其處に歡びの泉が湧き出づる。幸福は愛の影である。愛のない處に幸福はない。悲しむ者、怒る者、不幸なる者、彼は愛を忘却してゐるからだ。私達が愛情を以て萬象に接すれば、必ず歡びを発見するであらう。其の外觀は醜く共、愛情の眼を注いで深く探求すれば、必ず其處に美を発見することができやう。彼が若し「惡人」であらう共、愛を以て應接すれば、必ず善に導くことができる。此の転住所の中にも、私達は限りなき美と歡びを発見できるのだ。所内生活に醜惡と畸形をのみ発見して不幸を感ずる人は、世界の何處へ行かう共美と歡びに遭ふことはないのであらう。愛は強いものはない。愛は万能だ。愛こそは至上である。愛に依つて統御されないもの、純化されないものはない。冷厳なる法の力を以てして尚且改悛さすことのできない罪人をすう、淚と共に改悛さす力を有つてゐるのは温かい愛だ。祖国を、同胞を愛する者は歡んでその生命を捧げる。死生を超越したこの崇高なる愛のみが、その祖国と同胞を救ふのだ。

人間を憎惡したり、環境を嫌惡する代りに、愛情の眼を注ぎ、美を発見して、それを哺み育て、行かうではないか。斯くて私達は歡喜と幸福を贏得るであらう。先づ人間を、そして環境を愛することから、私達は明日の生活のスタートを切らうではないか。

輸

青木

看護婦の柔かい手に支へられた私の左腕から
今、静かに試験管の中に吸込まれてゆく私の生血……
衰弱の極に達した友への輸血の用意に
血液の型を調べる爲に集つた七人は後に續いて室外に待つてゐる。

患者の血に合はない私の血は役に立たなかつたけれど

私は今更なばう輸血といふことの尊さを必々感じさせられた
そして人生は、かうして強健な者から病弱な者へ生血を分けても
みんな仲よく生きてゆかなければならないといふことを。

血

伸

自分の血液の型をしたメダルを首にかけて出征する兵士達！
負傷した時の危急に備へて
捧げた無名の人々の血液は罐詰にして戦地に送られるといふ
何といふ深刻な現実！
何といふ聖い犠牲！

昔から互の血を吸り合つて兄弟の契を結ぶに義もあつた
人間一人の命を救ふ爲に、輸血といふ美しい事も行はれる現代
人愛よ！ 何が故に無駄な血を流し合はなければならぬのか。

浦路

と 勘須磨

—— この拙稿と三田千枝夫人に捧ぐ ——

翠川

敏

「浦路の小母さまが　こんな結構なお形見を下さいましたの……」。若い師匠は　やつとにラの旅を終へたばかり　花車な手先が白魚のやうに動き包紙は静かに解かれて行つた。朗かな内にも緊張味を帯びた零圍氣——　思はずゴクーンと喉元に悶へてゐた息詰りが流れ出すのを感じた。中からは　豫て聞かされてゐた「伊達兵庫の髪と　髪かざり」とが——　京洛島原の里に由緒を置くとか——

その瞬間「やつたな!!　さては浦路もとう／＼手離したか　それにしても何んと好ましい捌口を見つけたものだ。渡して定めし肩荷も下りたであらふ。」——　と同時に　受けた師匠の心の中を推量して「さぞや……。」と思はざるを得なかつた。何故ならば　ヒラの舞臺で藤間勘須磨が恩を返したことが確か

に判つたからだ。そうして、その生きた影が恰も繪巻物を繰り展がられるやうに眼の前を往来して行つたので――

私が 浦路と 最初に遇つたのは――

口さがない京童^{ワキ}達が、無意識の中にも「今日は帝劇、明日は三越」を囁いた頃、今から四半世紀以上も昔の談、華かなりし「帝制黄金時代」であつた。

母にとつては凡そ縁の遠い芝居社會であつた。然し、同郷の誼^{ヨミ}みも手傳つたのであらう。曾て、妹のやうに可愛がつた牛圓貞子が丸の内にすると云ふので、近代劇協會が出したゲエテの「ファウスト」を見に連れられて行つた。

牛圓貞子（衣川孔雀）が、未だ東京澁谷の實踐女學校へ通つてゐた頃、よく訪ねて来てゐたのを覚えてゐただけに、孔雀のグレエトフエンが燈を捧げて登場、窓を明け、迷懷があつて、着物を脱ぎながら「昔ツウレに王ありき」と云ふあの歌を微吟し始めた時には、不思議なほど興奮^{フウコン}に馳^かられ「花園」でファウストの腕に凭^{もた}ながら思ひ入つた風情で信仰のことを訊ねるところから、短劍に胸を貫かれた「悲しみの聖母」の像に花を供へ、小さい胸に包みかねた悲痛の情を訴へる邊り「暗い牢獄」の中に重い鉄鎖を引攪^グり、狂氣して童謡を歌つたまで、唯夢中で見てゐたことを今でも記憶してゐる。

スル／＼と幕が下りて、樂屋に孔雀を訪問、舞臺裏で、上山哲十人（ファウ

スト) 伊庭孝(メフイスト) 山川浦路(魔女) の諸氏にも紹介された。

山川浦路は人も知る通り上山草人夫人 近代劇協會の幹部 新劇勃興期に際し逸早くその真只中に馳せ参じた可憐な學習院女子部出身の女性であつた。

この邊で 話の順序として 明治中葉より大正にかけ 日本劇界を見舞つた新劇運動の勃興に至つたまでの経緯を極く簡単に述べなければならぬ。

古い記録によれば 徳川の初期に芝居が御法度になつたことがある。現在大阪御霊に保存されてゐる文樂の人形芝居が持つて来られたのはこの時代であつた。つまり人形ならば可からうと云ふ譯であつたのだ。後年 追々 幕府の極端な矯正方針が緩和されるに至り 人形の振りを人間が勤めるやうになつた。これが他でもない明治初期まで「歌舞伎」と稱されて来た日本の芝居である。

今日は「歌舞伎」と改稱されてゐるが 俗に斯の社會で云ふ「芝居の型」とは實は抑々人形の型のことで それを傳統を逐つて演出しつゞけて来た譯なのだ。

もつとも 徳川末期より明治にかけて 偉大な劇作家 南北や黙阿彌 等が出現 人形の型から解脱せしめやうとする努力も試みられた。然し結局は不成功裡に終つてゐる。

明治の開國は日本の凡ゆる部門に新機軸が施されることになり 畢竟それは日本劇界にも波及しないで置かなかつたのは當然であつた。

新しい時代に目覺めた日本人が百年一日の如く繰返されて来た芝居に倦みな

い理由^{ワケ}がない。必然な結果として現はれたのが 團菊左三名優の相次ぐ長逝後に訪れた歌舞伎の衰微時代である。

世は擧げて 輸入文化の全盛期 懸て新しい物の生れる前提として 日本演劇も歐化運動の渦中に投ぜられることとなり 先づ試みられたのが故坪内逍遙氏の指導になる文藝協會の仕事であつた。文藝協會が案外に早く解散した主な理由は理想が餘りにも宏遠であつた爲で 餘技と興行とを混同したのに基くものと云はれてゐる。

序^{ツギ}に 支離滅裂になつた文藝協會の分流を擧げて見れば

近代劇協會（上山草人 山川浦路 伊庭孝 衣川孔雀 澤田正二郎 等）

無名會（東儀鉄笛 土肥春夢 等）

舞臺協會（佐々木積 森芝次郎 等）

藝術座（島村抱月 中村吉藏 松井須磨子 山田隆彌 等）

以上四つのグループで シェイクスピアであらうがイブセンであらうがトルスト尹であらうとも 泰西の戯曲^{ギキョク}を片端しから翻譯上演したものであつた。

この他に小山内薫^{カール} 郡寅彦^{ユラヒコ}の両氏が左團次宗之助一座に試みさせた「自由劇場」の運動もあつたことを附言して置こう。

変則^{ヘン}ながら所謂「新派」なる物が現れたのもこの時代であつた。如何に新しい物が理由なく受けられたかの例證として 歌右衛門を始め歌舞伎座の幹部連

でさへ根城^{ネジ}を明渡したばかりでなく、その頃、東京神田にあつた東京座に立籠り、其處で新派の真似を演じたことも擧げられもするが、今は昔談しとなつた。このやうな混沌^{トシ}とした風潮も、應ては行く所まで行つて鎮まり返る時が来た。海の彼方より押寄せて来た「寫實主義^{リアリズム}」への段階に入る運動が抬^{モタ}げたのである。殊更に俳優の人格が去々せられるやうになり、演技に當つて個性の表現が注文され始めた。斯くして、観客も更^{マシ}めて、たらふく食つた人間が満腹の後に襲ふ食物の吟味觀を覺えるやうに、唯單に新しいと云ふ理由だけで夢中で見て来た芝居を考究するやうになつた。

上山草人のハムレットと澤田正二郎のそれとを對照して趣味に浸るよりも先きに解決すべき問題が横たはつてゐたのに氣がついたのである。よく劇評家が口にした言葉に「歌右衛門^{ナリクマヤ}の政岡や淀君は眞物以上だ」と云ふのがあつた。新劇のグループの人々が、俄然、訪れて来た運動の中にあつて、自己の行手を見極められず焦つてゐる間隙^{ゲキ}に乘じ元の根城へ假參した歌右衛門が演技を更生して受けた批評に他^{オナ}ならない。これはホンの一例に過ぎない。事實、今日の觀客は役者そのものよりは、演技の上に現はれた個性に興味を持つて居るのだ。近松物の取扱ひ方さへが役者によつて違ふやうになつた。新しい劇作家によつて古い脚本の書き直しが行はれたことは茲に更めて云ふ必要もなからう。

私が 浦路と 再度^{マタ}遇つたのは

近代劇協會が東京溜池の演技座にかけた「役者の妻」に失敗し米國へ渡った上山夫妻を再渡米したまゝ東行する前、羅府の假寓に訪れた時であつた。丁度渡米中の水谷兄妹も居合せたので懷舊談に華が咲き時の経過を忘れさせた。

若しも當時上山草人に島村抱月が松井須磨子に「カツウシヤ」を演^ヤらせた程の大膽さと俗氣があつたとしたならば近代劇協會の運命も切開かれて行つたのではなからうか？ 彼は餘りにも藝に正直過ぎた。

何處の劇壇も同じ轍を踏む。時勢を見極める處置が最も大事であるのは云ふ必要もない。然し劇壇の盛衰は一に餘^{ドウラク}技と興行との調節如何に懸つてゐるやうに思はれる。

一敗地に塗れたとは云へ日本劇界の歐化運動に對^{サカケ}して新劇勃興期に至つたまでの功勞者であるのにも拘はらず何故報いられない日を異境で送らなければならぬのか？ 往年の子役は今や日本で押しも押されぬ名女優となつて目の前に君臨してゐるではないか？ 餘りにも経緯を知るだけにその日の上山夫妻を見るに忍びなかつた。

濱口須磨子が渡日すると聞いて最も悦んだ人の中に浦路がゐた。日本劇界を隅から隅まで知り盡す彼女である。人一倍意に止めて来た娘若しや間違ひがあつては心遣ひから日本にゐる古い和入達に檄を飛ばしたらしい。

その昔 頭カブて使はれた取巻きの中には 斯界の大家になつてゐる者があつた。門下生が少く名取が稀なことでも判る通り藤間の門を潜るのは日本生れでも難かしい。須磨子が俳優學校の入學試験にパスしたのは 玄ふまでもなく實力が物を云ふたのである。併し 其處には浦路の骨折りが萌もした幸運が待構へてゐたのを見逃せない。

よしや須磨子が勘十郎ゴダイメの門を潜ることも出来ず 菊五郎ロラダイメの弟子に成れなかつたとしても 名取りとなつて飯米したであらう。けれど 内に秘められた精魂を發露する極意を授かる機會には恵まれなかつたのだ。

我々が死んだ仁マツシマヤ左衛門が得意とした「名工柿右衛門」に動かされたのは 仁左衛門が柿色の陶器製作に成功した演技に打たれた故ではなく 美しい柿色を美しいと眺める名優の心の響を聞くからであつた。其處に極意があるのである。勘須磨は迷懷してゐる。菊五郎の師匠であつた勘十郎ゴダイメの踊りよりも どう見ても菊五郎の方が上手に見えて仕方がなかつたさうだ。派手であり綺麗キレイであるからであつた。然し 見るにしたがつて

常盤津「戻り駕」を松尾大夫の出語りで踊り 長唄「娘道成寺」を松永和楓の地で勤める幸運にも浴したと云ふのも 要するに幸運なカーレントに日本で乗れたのに由つてゐる。幸運な鍵カギを與へた恩人に報ひ度い氣持ちは盡きなかつたが ついぞ羅府では機會もなかつた。ポストンへ移つた勘須磨がヒラから呼

ばれた時「今度こそは……」と期待して行つたらしい。

「小母さま お蔭様で名取りになつて飯りました。何分 今后共よろしくー」
挨拶されて速くも五年 今まで左程深く意にも止めてゐなかつたが「どうぞ」と目の前に座はられた時には 思はず 穴のあくほど凝視せざるを得なかつた。
今は昔の須磨子ではない。登記とした藤間勘須磨である。浦路は如何にしても刷毛持っ手が震ふのを抑へることは出来なかつた。「こんなに分ふのことは――」何故ならば 招かれて来た者に「顔の作り」を乞はれるのは この社會では何よりの名譽であるからだ。

他の所作を踊る積りで行つた勘須磨も所望されたので またもや「浦島」を勤めることになつた。楊幕で出を待てば久し振りの好い氣持である。やがて「トントン」太鼓の音 出を呼ぶ波の施律 幕は大海原のやうに碧い。勘須磨はこの刹那 水平線の彼方に龍が登るのを 目のあたり見たやうに感じた。傍うに見守る恩人の目には泪が光る。

讀者に一言――「伊達兵庫の髪と髪かざり」について詳しく書く積りで居りました。餘白がないので今回は割愛します。浦路夫人が博物館にでも献上しやうかとも思つてゐた所 勘須磨師匠の浦島に打たれて手渡した物ださうです。若し 機會あらば また書くことにしませう。

隨筆と語る

谷川江浦草

隨筆といふものが何時頃から流行り出したものかよく知らないが近頃の日本は兎に角隨筆時代を現出した觀があつた。作家は勿論のこと實業家も政治家も學者も藝術家も、男も女も、少し誇張していへば猫も杓子も隨筆を書く。その内容に於ても多種多様で身邊の雜事から趣味の話、或は又本職の餘談と云つたあらゆるものが書かれる。着物の話や建築の話があるかと思へばくだけた文明批評がある。食物の話があるかと思へば便所の話もあるといった工合で一口に隨筆と云つても中々簡單ではない。

昔の隨筆或は文學上に占むる隨筆の價值などについては今語るだけの材料の持合はせもないが枕草子や徒然草などの隨筆、それから降つては徳川時代の記録的、考證的であつたものなどに比べると現代のそれは要するに誰が何を書いてもいゝと云ふことになりさうである。尤もそれには一つの條件を加へなければならぬ。これが特に隨筆に現代的意味を附加する大きな役割を果してゐると思へるからである。と云ふのは、この誰が書いてもいゝと云ふことは本當に

誰が書いても所謂現代的意味の隨筆としての價值を持つかどうかと云ふことである。もつとハッキリ云ふと權兵衛や田伍作が書いても内容さへよければ立派な隨筆として通用するかどうかと云ふことである。ところがどうもさうではないらしい。その証據に隨筆を書く人は例外なく多少とも社會的に知名の士に限られてゐる。だから俺は文學が甘いから隨筆でも書いて天晴れ天下に名を成さうと云つてもそれは話が逆な譯。尤も中には作家などでどこへ送つてもサッパリ賣れない小説などを書いてゐるうちに何かの機會で軽いものを書き、それが大いに當つて隨筆専門家となつた様な人もなくはない。しかしこれは例外で大體前の様な意味に於ける隨筆家が普通と云へやう。だから内容は少々面白くなくともいゝ隨筆を読む方ではその興味の中心を主として書く人の上にかけてゐる。

最近には特に時代の反映でもあつたが科學者に隨筆を書かせることが流行つた。もと／＼科學者などゝ云ふ種類の人々は文學を書くのが下手——とまで行かないが兎に角餘りさうしたことに興味の無い人々が多いのであるが中には文筆にたづさはる人も頗負けする程の文章家がある。斯うした人々の文は着眼が面白く觀察が極めて微密である上に科學者と云ふ社會的に特殊な地位即ち一種の知名の士であると云ふところから殊に世間うけが好かつた。一寸思ひ出したゞけでも吉村冬彦、中谷宇吉郎、小泉丹、森於菟、石原純、宮本武之輔、伊藤忠太、竹内時男等々その他数へれば澤山あらうが、この人々はその専門に於ても第一

人者であるが隨筆界——こんな言葉はないかも知れないがまあそんな方面でも大御所格である。これらの人々が書くことは主としてその専門の餘談である。通常の社會といふものは至つて専門的なこと、特に科學などいふものとは縁遠くそれだけにさうした方面の話はもの珍らしい。これがひいては科學心に乏しい社會に大きな裨益をしたことは争はない。

それに就いて今でも忘れ得ない一つの記憶がある。今最初にその名を擧げた吉村冬彦氏は本名寺田寅彦、人も知る漱石門下の逸足である。この人は本來が物理學者でその方面でも最高峰にある人であつたが又文章家としても令名の高い人であつた。時は何時であつたか忘れたが何でも昭和五、六年頃であつた様に思ふ。海軍大演習最中に土佐沖で一隻の驅逐艦が砲塔爆破の爲に沈没したことがあつた。海軍省は公式發表を以つてこの沈没が不可抗力でありそれが如何に帝國海軍の訓練が猛烈であるかの證左をなすものであると説明した。ところが物理學專攻の博士にしてみればその不可抗力であつたと云ふ説明に充分の納得が行かないし、どう考へても技術的不熟練と不注意が生んだ過失としか結論の下しやうがなかつた。そこで博士は多数の海軍技術將校——その殆どは嘗て博士の薫陶を受けた人々であるが——に會つてどん／＼問ひ質してみると疑ひもなく過失による沈没と判明した。その時はその儘であつたがそれから一二年程して隨筆の中に次のやうなことを書いてゐる。

「驅逐艦沈没の眞因が判明した時に私は隨筆を以つて海軍の公式發表が國民

に嘘偽を強ひるの甚だしさを指摘しやうとした。私は科學にたづさはる學者としてその良心の前にも黙すべきではなかつた。そこでこのことを夕餉の膳についた時に二人の娘達に何氣なく話した。すると娘達は、お母さん亡後の私達はお父さんだけが頼みです。お父さんに若しものがあつたら私たちは生きてゐません。どうぞそんなことを書くのは思ひ留つて下さいませと、目に一ぱい涙をためて諫めるので遂に／＼娘達可愛さの爲に自分の學者的良心を鈍らせてしまつたが今、省りみて本當に恥かしいと思ふ。私は誰をも責めやうとは思はない。しかし事實を歪げるのみならず猛訓練なる美辭を以つて國民を偽瞞せんとすることは國家の將來を誤るものである。私が斯うしたことを云はねばならない事も學者的良心以上に常日頃筆を執るものゝ果さねばならぬ責任の一つではないかと思ふからである。

これを讀んだ世人はもとより海軍當局に於てさへ吉村博士の學者としての又文人としての眞摯さに打たれたと云ふことであるが隨筆もこゝまで来るともう立派な社會評論である。

いろいろなことを書いたが隨筆と小説とはどう違ふかと云ふ問題、これは簡単な様で一す區別がつけにくい。小説は構成をもつてゐると云ふが隨筆の方にも一種の構成があつて私小説などゝ可なり似通つたものがある。とまれ、隨筆はたゞ書く方も讀む方も何となく生活の餘剩とでも云つたものを感じさせ、感じ、そこに特質があればあると云へるのみも知れない。

隨想

緑蔭に綴る



外川 明

伸びの早い南國の樹々は、何時の間にか新緑を繁らせて、未だ四月も半ばだのに、キャンプはもうすつかり青葉若葉に埋められてしまった。

『朝夕のこの清々しい何とも玄へない氣持よさに、僕は自分の體が健康の爲なのか、食べて美味く、働いてよし、寝てよし、何をしても實に愉快です。』

と語りながら、K君は小さな池の水を替へてゐる。下着のシャツからはみ出している逞ましい彼の筋肉と、水の少くなつた池の底で、音を立て、跳ね躍る真鯉の勢のよさに、私は暫く立止つて見とれてゐた。

今年こそは季節の病氣、ヘイワイバーに負けたくないと思つてゐたが、逸早く侵されてしまつて、憂鬱な日の續く私には、この生きる悦びに満ち／＼てゐる健康の友が沁々羨しかつた。

三梁一窓の小アパートの主人公翠川さんが、『窓をもう一つ増へたいからYさんに頼んでくれ』と云ふ。窓を明けるつて何と云ふ好い言葉だらう。鬱いであつた私の心にも、パツと明い光が射し込んだやうな気がした。

私は窓が好きだ、南向きの明い窓は特別にも好い。今までに、窓の詩は幾つも讀み、又書いても見た。そして「窓」と云ふ詩集を出したいと想つたこともあつた。窓の無い室内に閉ぢ籠るといふことは堪へ難いことである。『眼は心の窓』と謂はれてゐるが、その大切な心の窓を一生涯塞がれてゐる盲目の人々の身の上が思ひ遣られる。

窓といふものは不思議な作用をするもので、毎日見慣れてゐる何でもない存在でも、それを窓の中に見出す時、新しい美しさと懐しさを感ずるものである。部落内でも飄輕者のN夫人が、共同洗濯所の窓から、外を通る夫とヒヨツコリ顔を見合せて、『ハローデヤ』と聲をかければ、『オ、ハロー』ハロー／＼ハロー／＼と應へるN君のこゝ顔。當に二人共窓の魔術に魅せられたのであつて、十数年の結婚生活者が、新婚當時のやうな親しみ振りである。

窓といふものは、内から外を眺める爲にのみ必要なものではなく、無涯無限の宇宙の萬物を、一定の線で仕切る爲に重要な役割をつとめるものである。

宇宙の森羅萬象を、そのまゝ自己の所有物として愛してゆくには、餘りにも

寂しい人生ではないか。さうした寂しい心が、知らず識らずに窓を求める心となつて私達の内面に働いて居り、無涯の視野に線を引き、枠を作り、その中に繪を畫き、寫眞をうつし、詩も作れば、生花もするのである。想へば凡ゆる藝術が、窓を作る心から生れて来ると謂ふことも出来る。

『好い工合にあげて貰つたね』と翌朝、窓の外から聲をかけたら、『お蔭で朝寝が出来なくなつたよ』と翠川さんは眩しさうな眼をしながら應へた。世界中、自由自在に歩いて生活して来たらしいこの人が、果して小さな一つの窓に親しみを持つるか否かは知らないが、私は、聽てこの新しい彼の窓に展開する色色の情景を想像する。

四月八日——日曜日、物凄い程砂塵風の吹き荒れる日であつた。が、豫てかう是非共聽かせて頂きたいと希つてゐた升岡開教師の法話があるといふので、高校の講堂で催された釋尊降誕祭に参詣した。物の使用法の分解説明から説き起して、深切に、叮嚀に、しかも、たつぷりとユーモアを含ませながら、最後を、『勿體ない』といふ言葉で結んだ手際の良さには敬服させられた。

同師の謂はれる如く、『物』に内在する神性、佛性を大切にして、凡てのものを浪費しないといふことは最も大切なことである。『勿體ない』と云ふ言葉は、決して吝嗇を意味するものではない。眞に『もつたいない』といふ言葉の

意味を解し、この心をしつかりと胸に抱いてゐる人は幸福である。『もつたいたい』といふ心は、物一つ、今日一日をも決して無駄にはしない。『勿體ない』といふ心は、宇宙の凡てのものを活かす心であり、拜む心である。

あゝもつたいたいなし

もつたいたいなし

けさもまた粥をいたゞき

朝顔の花をながめる

妻よ

生きながらへばならぬことを

自らは はつきりとおもふ

こんな美しい詩を病牀に残して永眠した山村暮鳥が一入親しく想はれる。

或日こんなことがあつた。私は食べ終つた茶碗（マシボール）に餘り澤山な飯が附いてゐたので、その器に茶を注れ、さうくとかきこんだ。すると、傍に座つてゐた友が、『おゝ、それぞれ、グードアイデア』と云ひながら彼も同じやうにして食べ、尚も言葉を續けて、『僕はキャンプに来て初めて飯の美味さと有難さどが解つたね。日本人には何と云つても米が第一だ』と云つた。

私も彼も、一粒の米の「もつたいたいなし」を知つただけでもキャンプ生活が無意義でなかつたと想ふ。



錯覺

眞澄丘

與謝野昌子が「鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は、美男におはす夏木立みな」と一首ものした所、實は鎌倉の大佛こそは、その本籍、釋迦牟尼如来ではなくして、阿彌陀佛の像であり、折角の歌人の面目も學者や専門家の話題になつたところがある。人間は無意識の中に錯覺し、足らざる知識が自ら自己を錯覺に陥れることは常に有り勝ちである。

「跣足等で歩くな、野蕃人が……」等と怒鳴る人もあるが、印度に於ては修行者の行規の中に、跣足の理由を明示してある。跣足で歩むことによつて、履物を用ゐるよりも足の底面に瓦礫や石木の刺戟を受けることは理論的に疑ひない。従つて必然、腹に力が入り、行歩し乍ら、靜座や坐禪と同一價値を生ずとする。且又酷熱の地に住む人々が朝露を踏んで歩む跣足の快感は、履物常用者達のおづかり知るところでないと思ふのである。

「綿の一貫目と鉄の一貫目とどちらが重いか。」こんな愚問を發すると、「人を馬鹿にすらあ、一貫目に違いがあるか。」と叱られるかも知れぬが、然らば逆に

重量を知らせず、然も同一の重さのものを五六種も形を変へて作つて、これを誰かにその輕重を尋ねたら、必ず容積の大きいもの程その小さいものよりも輕く感ぜられるのは、心理學者の實驗を通じて明かである。琉球と臺灣とどちらが南にあるか。」と尋ねたら、「判り切つたことだよ。沖繩の島々を飛石づたひに渡つて臺灣に行けるのだもの。そんなことは三歳の童児でも……」といらぬ駄辯まで加へて答へるかも知れないが、よく地圖を眺めて見ると、琉球の八重山諸島の最南端、波照間島は何んと、臺中よりも南にあるのだからウツカリお喋言も出来ない。「神戸と和歌山はどつちが西にあるか。」との愚問に「そりや神戸から大阪まで東行して、南方へ行くのが和歌山への道だから神戸が和歌山より西にあると思ふ。」が、これもよく見るとどうやら大阪から和歌山までの南西への線が長い為め、實際は神戸が和歌山よりも東にある。(一寸和歌らぬもの)

佐渡と越後はどれ位の距離か等と中學校の入學試験問題みた様な問題を出されたら、佐渡おけさの一つでも知つてゐる人なら「四十九里」と即答するかも知れない。ところが新潟から佐渡へは三十二海里、寺泊から佐渡へ三十二海里直江津から三十八海里、それでは一体どこからが「四十九里波の上」かと計つて見たら、石川縣能登のヲギ小木の港からでないかと合點がゆかぬことになる。

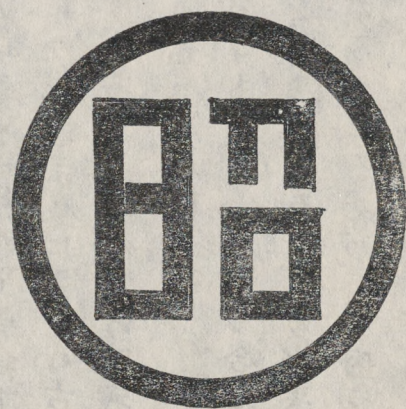
日用語の錯覺ときては全く殊の外である。「飯を焚け」「提灯に火をつけ」のところはまだしも、「嫁を取る」等は人妻誘拐罪の張本人の様にひびく。「頭をつん

でくれ。殺人罪で死刑囚の候補者にでも志願せぬ限りは、うづかり、OKも云はれない。放火犯人にもなりさうなのは、「ルームに灯^⑧をつけてくれ。」「風呂を焚^タけ!!」愈々御念の入った本末顛倒是「風が吹く。」と云ふ、實際は吹くから風と云ふのである。風の原理をきいて用つて見るとおかしくなってくる。然しこの言葉の錯覺こそは英國の宗教學者マックス・ミュラー博士をして、「宗教起原論」の一大根底たらしめたのだからビツクリせざるを得ない。博士は「言語の疾病」と呼んで、古代人類の創案した言語の最初は萬象を「動詞」を以て表現した。そして古代印度の「ベータ」等に出る言葉は風のことを「口笛を吹くもの」と云ひ、太陽を「金色の矢を射るもの」として擬人法を用ひ、且つ動詞の型態に於て示されたものが、後世この言語を通じて自然現象を人格化し崇拜し始めたのが現代人の宗教起原であると説く。だから何れの現行宗教にもその古代思想の名残りとして「天」と云ひ、「光り」と呼ぶものがあり、洗禮等の形式を求めてゐると云ふのである。嘘から出た眞實^{マコト}とは彼の宗教起原論か？

小豆やビーズで作りながら羊羹(羊のあつもの)とは一寸合點が中かぬと思つたら、支那の生臭坊主共が寺内に羊肉を持ち入れることの出来ないため最後の窮策として、せめて形や色丈けでもと云ふところから、羊肉の切身に擬して作つたのが羊羹だと羊羹論に出てゐる。錯覺らしい假面の中にも眞理がある。

平素は極めて慎み深い青年が、今夜のパーテーに限つてどこで拍子がくるつ

たのか、へべレケに酔ひ乍ら尚飲みつづけてゐる。ほとりの若い人妻が「そんなに飲まないことよ……わたし心配だワ。」同席の背の君急に機嫌をそこね、最後には離縁談にまで話は進んだ。仲介の人から忠告された人妻、「デモ妾、人妻ですもの。」人妻なるが故に」と云ふこの両者の思考が正しい考慮と錯覺から生む誤解とにより、斯くも大きな人生の破綻まで引き出すことを思ふ時、人間生活も亦考へ様によつては、將來に對する人間個々の思慮の錯覺が今日一日を笑つて生かせ、希望に包んだ明日を迎えさせてゐる様にも思はれる。鬼も角この『錯覺』こそは哲學の大きな素地を吾人に示してゐるかに思はれてならない。これも私の錯覺であらうか？



将油は
マル昭

アリゾナ州グレンデール
昭和将油醸造会社

SHOWA SHOYU BREWING CO.
RT. 2 BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

些

誠意あれば

猿渡則子

いつかK先生の説教の中に、或る青年が愛人に一ヶ月六十通の手紙を出したと云ふ事で有るが、愛があり誠意があれば手紙を書けない事はない。結局誠意が無いから書けないのだとおっしゃつた。

之と同様に此の現代戦時下に於ても、人情は愈々輕薄に成り報恩の念は薄らいで行く。特に昨今此のキャンブに於ても、次から次にと人々は外部へ轉住して行き、「出ると水一ギヤロン使つても金だ、一仙だつて貯めておかねばならぬ」と云ふ聲を良く聞くのである。無駄を省いて貯める事は當然の事で有るが、其の爲に報恩、義理、人情も忘れて只我慾にのみ走つたとしたら、ひいては子女教育にも關係して行くのではないかと考へられるので有る。

かうした時にこゝに珍らしくも少からぬ金を眞心から投じて、謄寫版を買つて下すつた一婦人が有る。此の婦人は現在二十二區に住んで居られる。私が此の方を知つたのは十四年位前で有る。子供さんを五人學園に出されたので父兄の一人として知つたのであるが、それから縁有つて此の婦人の近所に移轉して

行つた。此の前後事業半ばに杖とも柱とも頼む主人に先だたれ、子供はどの子も一人前に成つて居ないし、本當に婦人は人の知らない苦勞をどれ位されたか分らぬのである。

或る時など事業も思はしく行かないし、學園の月謝さへ思ふ様に拂はれぬと涙ながらに話された。「今が一番子供教育に大切な時期、決して教育を疎かにしてはいけません。どんな犠牲を拂つても強い／＼母に成つて戦つて下さい。」と共に手を取り合つて相談した事も有つた。

それから月変り年逝き、幾年か艱難苦勞、努力の甲斐有つて子供さん方は皆良く成長していつた。

其の間婦人が子供の事で苦勞された一例を挙げるなら、長男のHさんで有る。此の人は現在フランスの戦場にあるが、心根は本當に正直で又やさしい所も有るが、子供の時はとても／＼ヤンチャで、クラス一番の騒ぎの大將で其の方のリーダーでも有つた。

男の先生方はHのヤンチャには困ると良く申されたので有つたが、而しあのヤンチャで騒ぐ中にあの子獨特の良い点をどうしても見のがす事が出来なかつた。其の一つは非常に讀書好きな事で、それを見出した時本當に嬉しかつた。此の子を騒がせない一つの方法は爲めになる面白い本を與へる事だと考へ、種々の良い本を次から次に與へた。全く夢中になつて讀み、だん／＼騒がなくな

つていった。其の中に少年俱樂部等を讀む様に成り、同じクラスの人が少年俱樂部等に興味を持つ頃は、キング 現代等の程度の本を讀む程に進んでゐた。余り色々の本を讀むので、又毎月の本代にお母さんを心配さして氣の毒に思つた。而し良き本に依つて教へられた点が多かつたと見へ、本當におちつきの有る青年になつた。

先日愈々オバシーに出るので此のキャンブに歸つて來た時も、師の恩を忘れず、イの一番に「先生歸つて來ました。」と飛んで來て色々と過ぎし日の思ひ出話に感謝の涙をこぼして出て行つたのであつた。そしてあの當時の親の苦勞を忘れずに、戰場からつひ此の間もお小遣にと送金して來たので、K婦人は涙を流しながら喜んで居られる。

長女のM子もしつかり者で特に歌とお話が衆を抜き出て上手で、我學園でも學藝會の時などいつも主役を務めて居たが、こゝポストンに來ても見る目の高い正木翁に見出されて、歌姫として皆さんに良い聲を聞かし、程無く良縁あつて再轉住して行つた。他の子供達もそれぐ成長して、嫁に行つたり仕事に出て行つたりして、只今K婦人は理解有る御主人と共に圓滿な幸福な日々を送つて居られる。全く「苦は樂の種子」で有つた。

さうだ、最後まで良い御奉仕を續けてやかう。ペンを置いて窓ごしに榆の燃える様な青葉に、五月の太陽が潑刺と輝いて見えた。

琵琶歌

安・倍・仲・磨

千崎如幻

われ日の本の一秀才、唯かりそめの留學と、海のこなたに
來りしに、拙き詩文めでられて、己れを知れる人のため、身
を忘れてぞ仕へける。三十余年の月も日も、學びのわざの
事しげく、昨日の夢と過ぎ去りつ。こたび暇を賜りて、歸
らんとすれば秋津洲、奈良の都の戀しやな。富もほまれも
唐土に、ありしがまゝのすさびのみ。日頃帶びたる一振の
劍も友に與へては、唯青杉の袖軽く、身を海鷗にたくらべ
て、暮くゆく雲のたゞすまひ、いざ故郷に歸りなん。明日は
船出と定りし、明州の浦の高樓に、親しき友の誰彼と、別
れのうたげ夜も更けぬ。浪路はるかに隔てたる、父と母と
がかくばかり、やるせなきまで戀しきは、心短きわが身かな。
鶯来鳴くわが宿の、垣根の梅もほゝえみて、都の春はうら
若く、朧月夜か今頃は。想ひ余りて仲磨は、三千里外の月
の下、昔習ひし敷島の、やまと歌をぞうたいける。

青海原ふりさげ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。
あやしむ満座の友どちに、歌の心をかううたと、書き改め

て見せしかば、情を知れるもろこしの、詩人墨客誰一人、
泣かぬものとなかりけり。其あくる日は四つの船、東を指
して漕ぎ出でぬ。海路半ばにはやてして、逆巻く浪の海底
に、あはれ人々沈みきと、傳へ聞きたる友どちの、心や
いかにみだれけん。二十八字の李白の詩、後の世までもう
たはれて、唐錦とぞ残りける。

日本、晁卿辞帝都、
明月不歸沈碧海、
征帆一片繞蓬壺、
白雲愁色滿蒼梧、

天運未だ盡きずして、明月再び波間に浮び、仲磨はまた
唐朝に、仕ふる身とは定りて、玄宗皇帝の御覺え、過ぎ、越
しかたと異りなく、肅宗、代宗と三代の、君に仕へて其官
は、左散騎掌侍安南都護、光祿大夫御史中丞、北海郡開國
公に進められ、唐朝の功臣として、七十余歳の天壽にて、其一
生を畢りけり。大和島根の根わけ草、花も實もある仲磨の、
ゆかりの跡を尋ねれど、長安の都幾風雲、星霜轉變千余年、
残る五言の六十字、唯ふる里のなつかしと、うたふしらべ
はさながらに、古今の歌の響にて、愁を抱き異國に、さす
らふものに示しなば、断腸の想に堪へかねて、聲などらかに
讀むほどの、心なき人なかるらん。

(本稿は常石芝青氏夫人より提供されたものである。)

ポストン生活印象

——同胞と山——

貴家去ま子

入所して一ヶ年の歳月を経過した此頃、同胞も餘程落付いてきた模様であつた。第二部落の各室では六月半ばに及んで漸く赤茶色のリノリウムを、床の上に敷いて貰つた。これで少し人間の住家らしく見えてきたが、ベードの足、テーブルなど一切の重い物の跡が窪んだ型に一面に残つてしまつて、まるで疮瘡を病んだあばたの顔のやうであつた。

七月十六日、スペイン領事来訪に依り、豫て市参事會の協議に成つたる米政府へ請願の事柄十一項が各食堂で報告になつた。

八月に入つて正式に隔離問題の件を發表に及び、「各轉住所に現在居住してゐる日系人の隔離」と題した小冊子が發刊になり、其の内容は如何にしてツルレキ轉住所が選ばれたか、轉住所に居残る人、移される人、隔離遂行の結果、或は生ずる不公平を是正する爲に上訴する権利、隔離所の經營、立退者の類別など委しく記し、隔離所は懲罰所でないといふ事實をも明にしてあつた。次いで隔離審問會委員として轉住居役員の内八名を擧げ、千九百四十三年八月七日朝よりこの審問會が開始されたのである。隔離終了まで凡そ二ヶ月餘り、こ

の間隔離に關する告知三十餘冊を發して各部落に配布した。隔離者出發の當時平生は寂しい部落の歩道もこれらの人を訪問或は別離の往き來に少からぬ賑はひを呈したのである。此間入營兵士、出征軍人の出入、再轉住者、旅行者、外部季節働きなどを見送る都度、バス停車場である郵便局の廻りは、大都市のやうな賑はひを呈するのであつた。

次に同胞一般の娛樂としては活動寫眞及び芝居であるが、活動寫眞は主に二世、芝居の方は一世の觀衆が多い。此他に二三の娛樂機關が設けられたが、河へ魚釣り或は泳ぎに行く人、山へ石を拾ひに又アイオンウードを挽きに行く人が、四十三年度になつてから益々増えてきた。ポストン生活の紀念品を多く作つた人は大概山へ行く人達である。磨いた美しい石を持つてゐる人もあつたが、石の方は相當に高價なミシンが無くては、自分で切つたり磨いたりはお出来ない業であるし、且つ値打のある寶石はやたらにある筈はなく、探し出すのに困難であらう。價格の有無は兎も角、他にあまり類のない産物を自らの手で技巧を施し作製したところに、この生活中の紀念品とすべき價值が生ずるのであらうと私は思ふ。此点から推してアイオンウードの方が、石よりも遙に優れてゐるであらう。此木で作つた物に立派な花器、盆、置物、木劍、杖などがある。今之を書いてゐる私の耳に、隣人がアイオンウードを磨いてゐる音が聽えて来る。入所の年の七月小學校建築に際し、アドベを作る爲に係りの人等がツラツツで砂利をパーカーの方へ取りに行った時、山裾の谷のやうな處に變つた一本の

枯木を見出し、何となく珍らしいと云ふ氣持に惹きつけられて、皆々が其木を折らうとした。ところが堅くて如何にもならないのに益々不審を抱いて、持合せの小さい鋸やナイフなどで總がかりで少しばかり漸くのことで伐つた所が、其切口に美しい木目が現はれたので皆々珍らしがつてそれを持ち歸つた。そして學校建築用アドベの造方を教へてゐる一人のインデアンから、それはアリゾナ特産のアイオンウッドで、伐る事を禁じられてゐると教へられたのであつた。これが一世同胞とアイオンウッドの縁を結んだ抑々の起原である。

ポストンから東に向つて約三哩程沙漠を歩いて行くと、地層の能く現はれた断崖の砂山が列り聳えてゐる。この邊がアイオンウッドのある山への入口で、此木の大きなのは谷間に多いやうで、それは一面にやたら繁つてゐるのではない。何くて、私の見た限りではそこゝに離れて一本づゝ生えてゐるにすぎない。何でも最初の山行きの人らは、此木の根ばかり堀つたといふことであつた。成程私が山へ行つて見た時、素晴らしい太い古株の廻りを深く堀り下げた穴やう、堀り倒したのやら、半分位を挽きかけて止めたのやら様々なのを所々に見た。次には古根を堀る事は廢れて人々は生木にとりかゝつたので、最近では此木の数が非常に少くなつたと山通ひをしてゐる人等が述懐されるやうに話してゐた。アイオンウッドは鉄のやうに重くて堅く、年数を経た幹は色も黒くなるので、斯く俗名が附けられたのであらう。學名はOSTRYA VIRGINIANA Aで、もう一つの名はHOPP HORNBELAMと云ふ。

この山には他では見たことのない変つた百合の花が、初めの内は澤山に咲いてゐたらしいが、人々に採られて近頃はこれなどを採すのに仲々である。小さな草花もかなり何種類も咲いてゐるけれど、矢張りある場所はきまつてゐるやうで、どの山にも咲いてゐるといふのではない。

自然に前から生えてゐた樹々の少くなつた中では、メスキトツリー林の一部もそれである。入所以来年々同胞の炭焼に伐られて、近頃は平地のやうになつた場所さへも出てきた。こゝから一哩位離れた處に曾て生え繁つてゐたグリースツリーの根も、最初には杖に堀られ、次は婦人の活花の稽古の材料として伐られたり折られたりして、今では山へ行かなくてはこの木は見られないやうである。さうかと思ふと最初活花の材料に私が欲しいと思つて、いくら探して歩いてもめつたに無かつたものが、水が入つた爲に追々殖え茂り、今では誰一人としてこれを振向く者もないまでに、元の養魚池の跡やドイツの側へ藪のやうに横がつてきた。私は時折そこへ一人で行つて花を眺め乍ら歩く。

いづこを見廻しても同じやうな沙漠でも、幾多の人爲的作業と大自然といふものゝ推移と相呼應して、月々年々に變化して行く。

唯にポストンの植物と我等同胞とのかかはりだけでも、これに眼を深く投ずる時多々興味深い事柄である。私は一ヶ月位毎日この事だけを書き綴つても、まだまだ足りない程であると思ふのである。

(つづく)



石の語

新聞惣太郎

誕生指輪

指輪の話の序にもう一つ誕生月の石入指輪の御話を致します。千九百三十七年三月全米寶石商組合の代表者が會合いたしましたして、米國共通の誕生月寶石の撰定を公表いたしました。

之は以前からヨーロッパの二つの異つた國民に依つて定められてゐた誕生月の寶石に對して、何事にも米國第一主義の虚榮心から獨特のものを作る考であつたのであらうと存じますが、其結果に於ては大した相違はなかつたのであります。今其三個の異つた表を紹介いたします。

一月	アメリカスタイル ガーネット	ポーランドスタイル ガーネット	ユダヤスタイル ガーネット	七月	アメリカスタイル ルビー	ポーランドスタイル ルビー	ユダヤスタイル オネツキス
二月	紫水晶	紫水晶	紫水晶	八月	サドネキス又は マリドット	サードネツキス	カルネリアン
三月	ブラッド・ストーン 又はアクマリン	ブラッド・ストーン	ヂャスパ	九月	サファイヤ	サファイヤ	オリバイン
四月	ダイヤモンド	ダイヤモンド	サファイヤ	十月	オパール又は ターマリン	アクマリン 又はベリール	アクマリン 又はベリール
五月	エメラルド	エメラルド	カルネリアン又は カルセデネ	十一月	シトリン	トツパス	トツパス
六月	眞珠又は ムーン・ストーン	アーゲット又は カルセデネ	エメラルド	十二月	トクキス又は ラピスラザール	トクキス	ルビー

一體此の誕生月の寶石と云ふ事は何處から發足したかと申しますと、聖書の出エジプト記第卅八章にある祭司長の胸當に付けられてあつた、エズラエル十二の支派に型取つた十二種類の寶石からであります。夫が又新約聖書では使徒ヨハネの黙示の中に示された新しい神の都、聖なるエルサレムの石垣を作る十二種類の異つた寶石となつて顯はれて居ります。後に此十二と云ふ數字は一種の神秘的意義に考へられ、エズラエル十二の支派はキリストの十二の弟子となり、更に轉じて新エルサレムの石垣の基礎と云ふ風に考へられたのであります。初め或る宗教に熱心なる信徒が此十二種類の寶石を集めまして、毎月變つた石の指輪を嵌めるやうにしたのでありますが、夫れでは仲々一般には六ヶ敷いので今日のやうな風に変化したものであると申されて居ります。

耳環

も随分古くから私共人類の間に用ひられた裝身具の一つであります。古いエダヤ人の傳説に依りますと、太古人類の始祖アダムとイヴが罪を犯して神の國エデンの花園を放逐された時、其刑罰としてイヴの耳の端に天使が穴を明けたと申して居ります。夫が爲かエダヤ人の間には昔から耳環は異教の風習として卑められて参りました。エズラエルの祖先の一人であるヤコブが神の前に檀を築く時に、懺悔の印として其妻達の耳環を埋めた記事が創世記の三十五章に記されてあります。又ホゼア書の二章にも、是れ憎むべきものであると記されてあります。

又或時代には耳環は男女共、奴隷の表象として用ゐられて居りました。又或未開人の間では其種族の記号として、耳環を目印に用ゐて居ります。其他原始的民族の間に用ゐられて居った装身具の内に

鼻輪

等もあります。併し此鼻輪も今日アフリカ土人の蕃族が使用して居るやうに、鼻の真中に牡牛然と嵌めるのではなくして、右の小鼻に慎ましく下げるのであります。若い美しい娘達の鼻輪は仲々愛らしく、現に印度の或地方では今も婦人の間に用ゐられて居ります。創世記の廿四章を見ますと昔アブラハムが其子イサクの爲に故郷カルデヤから新家を迎へるに當り、僕シエの頭エリエゼルに土産として、黄金の腕輪二個と重さ半シケルの鼻輪を持参させたと書いてあります。斯様な處から見ますと、當時若い娘達を喜ばしむる適當な装身具は「ウルトラ・モダン」の鼻輪であつたに異ひない。もう一つ面白い装身具が古代に流行して居りました。夫は

フブレット

と云ふものであります。L'ABOITE 之は寶石や美しい貝殻等で作つたものでありまして、下唇と齒莖の間に挿むものであります。其際下唇は自然に下に垂れるのでありますが、之が又當時の美人の典型でありました。年を取つたミユールのやうな口元の娘さんは確かに其頃美人投票で一等になつた事と思ひます。又其結果、齒の瑤瑤質に穴を開けまして、色々な寶石や金銀で象嵌のやうな模様を作るやうになりました。此

風習はメキシコ南部に昔文明の都を建設したアズテック種族の間にも、又中央アジアの或地方にも行はれて居つたのであります。

寶石と迷信

との關係も仲々深いものであります。エバツキスと云ふ傳説の内に出て来る假想の王様は、昔ローマのネロ帝と云ふ基督教徒迫害で有名な王様に献じた書物の中に、寶石の効用と其魅力に就いて、オーパルは目の治療藥として特別に効果があると申して居ります。又英國のオルター・スコット卿が千八百廿九年に出版した *Anne of Geierstein* と云ふ小説は、一朝にしてヨーロッパ初め米國迄も此オーパルの市價を半値に引き下げたのみならず、廿世紀の今日今尚不吉の寶石として、所有を拒む人があるやうになつたのであります。

Lady Herminie と云ふ美しい貴婦人が、世にも珍らしい美麗なオーパルを所有して居りました。そして其オーパルは不思議にも此貴婦人の感情の動きのまに／＼色様々に変化して其光を表はしたのであります。彼女の喜ぶ其時は柔しき光が目も眩しく光り輝き、彼女の神経が興奮した其時は火の如く炎々と燃え光り、憂鬱の時は奇しくもドンヨリと曇り、流石の美しいオーパルも一向見る陰もないものに變じたのであります。或日、此貴婦人が教會に詣つたのでありましたが、其入口に入るや不圖した事から洗禮用の聖き水の一二滴が此貴婦人に觸れたと同時に、突然其場に打ち倒れて氣絶して終つたのであります。

翌日、多くの人々が此話を聞いて行つて見ますと、無残にも此美しい貴婦人が只一握^ツみの灰と化して床の上に残つてゐたと云ふ物語の筋書であります。

十字軍の兵士

達が近東地方から歸つた後、寶石に関する色々な迷信や傳説が全ヨーロッパ中に擴がりました。龍と云ふ大蛇の如き怪物の頭には世にも珍しい寶石があるとか、地喰りのする處に大蝦蟇が居つて、其頭にも美しい寶石を持つて居る。そして其寶石が半月の夜、其玉の光が生命あるものゝ如く動き出す。若し之を取つて四十日四十夜麻の布に包んで置けば、臙^{よう}て素晴らしい魔除の効能があると信じられて居つた。夫から寶石は色々な病氣にも効能のあるものであると信じられて居つた。併し一般醫學の智識の幼稚な時代に於ては之又止むを得ない事でありました。凡て病氣は魔法や呪ひ等で全快するものであると信ぜられた時代に於きましては、珍らしく美しい寶石が病氣に効用あると思はるゝのは不思議でありません。

カルセデネーは瘋癲病に、エメラルドは萬病に奇効ありとし、又ラピス・ラザールは毒蛇に噛まれた時の特效剤として考へられて居つた。又古い藥學の本を見ますと、約二百種類斗りの寶石や礦物が其中に記載されて居ります。心臓病には琥珀、珊瑚、蟹の目、眞珠、鹿の角と黒蟹の爪を粉にして服用すれば癒ると書いてあります。又眞珠をレモン汁に溶いて用ゐた事もあります。

緑柱石

「田石」に海老の形や鳥の形又は木の葉の繪等を彫り付けて持つて居れば、シャックリ又は肝臓の病氣に効くと信ぜられて居りました。或時代の醫者が人畜の諸病を癒す寶石を持つた事は色の傳説に残つて居ります。

一方又寶石は毒素としても用ゐられた事が屢々あります。殊に往時群雄割據時代に於きましては、各領主の間に領地の爭奪が行はれ、間がよければ敵方の大將を毒殺する等の方法は幾度も繰返されたものであります。實際此寶石は常に主役となつて舞臺に踊り出したのであります。トルコの王様サルタンの毒殺されたのはダイヤモンドの粉末を用ゐたものであると信じられて居ります。又英國のキング・ジョンの死んだのも寶石に依る毒殺と信ぜられて居ります。王が或日の食事中デザートとして梨を食べた時に、彼の嵌めて居つた指輪の寶石に「汗」の如きものが付いて居つた爲に中毒したと申して居りますが、時は丁度千二百十五年「Magna Charta」に調印すべく余儀なくされた時で、事件が考へて多分毒殺ならんと申して居ります。

(註 Magna Charta は今日の英國憲法の基礎となつたもので、民権自由を認めた最初の立法であります。)

漫
筆
文
野
遊
會

有
田
百

三月十七日の登山行には、彼の岬々たる「岩山征服者」てふ不朽の名を遂に芳川積三君に譲つたので、此度の野遊會の集合時八時半の登場一番乗は——遠き者は耳を澄して聞け、近き者は襟を正して見よ——とでも大音聲に名乗り上げんものと、人のためなる「ニギヤロンの香水を右肩から斜に提げて出かけた。漫々と流るゝキヤナルの淀では、長閑にも釣糸を垂れてゐる翁がゐた。第十三ブラツク邊りに來た頃から、香水の重みに肩と腕とがしきりに苦痛を訴へるのであつた。

第五ブラツクの前の渡月橋を渡つていよ／＼市立公園内に這入る。若葉映ゆるモスキットツリーの間を縫ふて進む。四月末の光線は陽々と照りつけ、得も言はれぬ香りを漂はせてゐる。風なく、音なく、只チ／＼と鳴いて枝より枝に渡る小鳥数羽——。

腰をかゞめて、アドベのステージの方を透して見る。人影はまだ無い。今日こそ一番乗りの功名は我なりと、勇んでステージ近くに來るや、白色の電柱の傍に帽子も、ズボンも、ベルトも、靴も、皆白一色の颯爽たる英姿で佇立した紳士がある。

「やあー、お早やうー。」

「やあー、お早やうー。」と聲に應じたのは誰あらう芳川積三君である。彼氏

は何處までも第一番、第一等を連續するつもりなのか。時は八時二十五分。

山鳩のホロ／＼と啼くのが聞える。静かな、淋しい哀調の聲。

數百年の歳月を経たであらう風雅な枝振りに鬱蒼と茂つてゐた、ステイヂ前

方のモスキット・ツリーを、悉く伐り倒してしまつた炭焼く人の無風流には、

只々啞然とするばかりである。住民の内には、若葉の香を慕ふて来る佳人才子

の愛の囁きも聞ゆるであらうに。一家團欒しく納涼に逍遙するもあらう。紅

葉を賞玩する市民もある筈であるのに――。

大地を踏む音の方を見やると、今日の運動競技の主任重富初枝嬢が、髪も若

作りに艶々しい笑顔を見せた。

子供のゲームが始まつた。彼等の動作は天真爛漫だ。ほんとに清々する。特

に今日集つた子供達は行儀が良くて嬉しく思つた。

大人のアツプル食ひに興じた。ソツパに大口を誇る猛者が十名並んだのは近

頃の壯觀であつた。笛が鳴つた。駈けて來た。午後一時頃の日射しを受けた赤

アツプルはほんとに綺麗な珠玉だ。其の玉に――今しも鬼氣を帯びた、大口の一

群が、白い齒をむき出して、先づ一撃をアツプルに喰はした。玉はつるりと滑

つた。盛んに赤玉を右へ左へと滑らせてゐる。時に酒井知己君は、彼の偉大な

首を左に向けた。左肩より二寸程下にぶら下つてゐる赤玉を、下頤で巧みに押

へて「カブリ」とやつた。そして得意満面に一等旗を手にして咲笑した。

加藤統政部長は知己君の策戦振りを横目で見てゐたが、更に秘策を咄嗟の内に案出したのであらう。正面の觀衆の方へお尻をクルリと向けて裏で手品を使つたらしく、之れ又優勝した。正面より傍目もふらず夫の動作早かれと念願しつゝ凝視してゐた奥様は、特に眼を細くして限りない悦に入られた。知己君は「アップル食ひには頭が入るのだよ」と優勝を祝福する諸嬢に講義をしてゐる。仲々の愛嬌者で、此れでは曾つての加州大學でのアップル喰ひ競争の選手權保持者であらう。

寫眞結婚——從來使つた數字の代りに美人画を切つて、其の半面を新婦が持ち残りを新郎が携へて我れ先にと、脱兎の如くに走り、待ち焦れてゐる新妻が持つ寫眞と引き合せて歸つて來るのである。ほんとに良い思ひつきであつた。初枝さんのテキハキしたマノーデメントと共に頭のヨサを偲ばしむ。

胡仙鈴木翁の司會でマイクローフホンを通じて餘興が開始された。琴古會員の尺八——高雅なる哀調を帶びた尊い音楽だと今更のやうに感じた。日本人の思想と、シツクリ會ふ。豪壯な詩吟可なり。古歌又可なり。若き諸嬢の銀鈴の如き咽喉亦大いに可なり。

風なくとも暑からず、絶好のピクニック日和。斯くして一切の俗事を忘じ果てゝ、童心に還つて一日を楽しんだ。午後の日射しは漸く鋭くなつた二時頃に散會した。

此日三時頃、コロラド河を越えた加州の空が俄にかき曇り、やがて風を伴つた豪雨が沛然として天地をこめた。

僕の雜記帖

—愛に就て—

松原信雄

海の彼方では血腥い殺戮戦が展開され、世界各國民注意の焦點は遙かなる戦場である。此處避難所の若人達も亦日々の戦況に大きな関心をもつてゐるに違ひはなからうが、青春の血に燃えてゐる彼等の心の片隅には男女間の愛情といふシリアスな問題が潜んで居て、いつも囁きかけるやうである。

或日、若人達が眞剣な面持で戀愛論を闘はせてゐた。美しい夢を追ふ若人の常として、彼等の議論は何れも現實をかり離れた理想主義を一步も出てゐないので、僕は戀愛哲學を説いたり、

醜い現實の姿を暴露するつもりはなかつたが、「愛する者は苦惱し、愛される者は幸福である。愛する者は弱く、愛する者は強い。女よ、幸福を欲するなれば、自ら愛した男と結婚するよりも、先づ君に惚れた男の妻となれ。」

男は自分の妻を愛すると同時に、他の女をも愛することができる。」と口を滑らし、若い女性群から一齊射撃を浴びせられたのであつた。

生きてゆく爲の經濟的脅威から全く解放された理想社會が假令この地上に實現しやうとも、出産といふ人類繁殖の爲の聖なる使命を負ふべく宿命づけられた女は、男に依據し、愛を求むる生物的本能を持たされてゐる。

凡ゆる生物は自己の保全と發展、同類繁殖の本能に動かされて生きてゐる。

それを實現させるものは肉體上の慾望即ち食と性との充足である。

現代私有財産制社會のやうに、個人の生活が國家又は社會に依つて保證されず、且つ女性の自活してゆく道が、男性のそれに比較して少い時代に於ては、女性の男性に對する依存性は極めて強い。こゝに女の美を磨き、美を競ふ素因が胚胎してゐるのだ。それは男が智能を磨き、地位と名譽を爭ふのと同じだ。

「男の氣に入るやうに……」男に愛されたい。」さうした無意識的衝動が女をして、華美な衣裳に腐心させ、口紅、白粉、パーマメントに貴重な時間と出費を惜しませない。男に無関心たらざるを得ない變態女は化粧に時間を費したり、衣裳に浮身をやつさない。

一度、「理想の男」を求め得た女は、

彼をしつかりと抱きしめて離すまいとする。彼女の生物的本能は彼を獨占せよと命令するのだ。女は男に愛され、そして男を獨占してゐる時、幸福の絶對境地に達するであらう。

女に反して出産といふ大任を免除されてゐる男は、如何なる時代、如何なる社會であらうとも、自らを養ふのに苦勞はしない。男の負擔は極めて軽い。この身輕さが男をして、精神的にも亦肉體的にも放浪児たらしめるのである。之を要約して結論すれば、女は一人唯一人の男に真心の愛を捧げ、その男を獨占しやうとする。人類繁殖の能動的生物たる男は、一人の女を愛しながら尚他の女を愛することができる。それを浮氣だといふのは當らない。それが生物としての男の宿命なのだ。

「何が彼女をさうさせるのか？」生命の至上命令だ。「何が彼をさうさせるか？」やはり生命の絶対命令だ。

僕はそれを善いとか、悪いとか言うて居るのではない。唯、生物的地位から觀た男女間の愛に就て語つてゐるにすぎないのである。性的衝動から燃え上る戀愛（性愛）に就ては別の機會に譲らう。

近代社會は一夫一婦を最も道德的な男女關係であるとして、一般人はこの道德律に従つて極めて平和な兩性關係を持續してゐるといふことは贅言を要しないところである。

女は愛を受くべく、男は愛を與ふべきもの。

人間を最も歡ばせるもの、又、苦惱させるもの、それが愛の衝動だ。

COMPLIMENTS of

NATIONAL GROCERY CO.
MESA, ARIZ

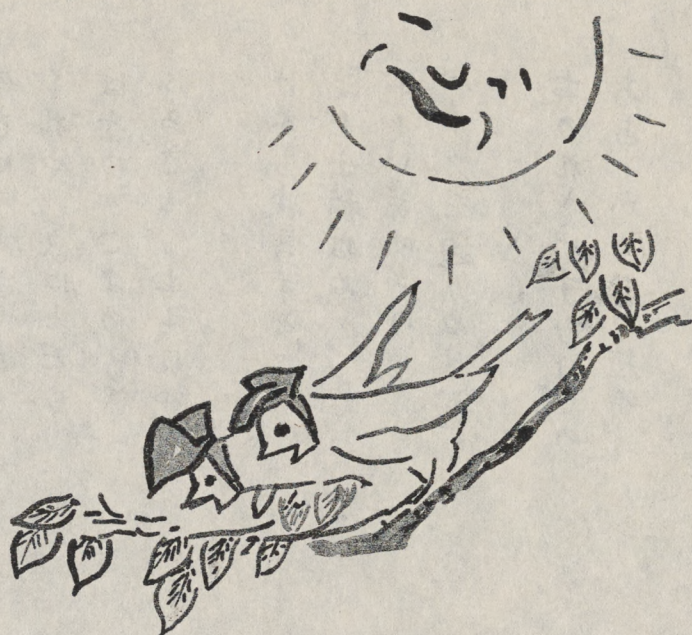
WHOLESALE-QUALITY GROCERS

SHOP ^{AT} SEARS
AND
SAVE

シーヤスで
買つて
待節約トス
イんのほろ
迅速に取扱ひ
ロイヤル商会

SEARS ROEBUCK & CO

LOS ANGELES, CAL.



川	短	詩
柳	歌	と俳句
鳥	永	外川
原	瀬	明
潮	勇	
風		

生活斷章

片井溪巖子

x

ゆきげまつまの

のきば あさくさく、

これや 急にしだの

はなの こよのうて、

ふるさと おもほゆ。

x

けふも淡雪する

まだ出揃はぬ、

おそい芽吹き

パークを通りぬける。

x

おのれさげずむほどの、

ああ、かつての短所。

x

あさゆふのかほに雪山、

やつかいな つめたい

ランチペールをさげて、

こころもとない靴音。

x

うそとまことの、けぢめ。

x

早春の花はみんな

きいろいはなばかり。

急にしだの素朴さ、

ラナンキラー ダホデリー

低いツベロサのねたましさ。

寂しい手をあげたる

葉柄のしなやかさ。

こゝなつかれた魂をば、

預けておきたいやうな、

さすらひのはてしなさ。

釣つてゐるAさん

外一篇

木内春波

Aさんは釣つてゐる……

寒い日も暑い日も釣つてゐる

私は散歩する度に掘割の土手から

一寸立止つては見るAさんの姿——

陸軍服の上着——入所當時のお被服しきせ

麥藁帽子、此れも歴史付きの古物

ドングリパンツ此れも御下附の代物

ぢいつと水面を見つめて餘念がない

『釣れますか？』聲をかける

『ポーチに鯰と鯉で——』と答へる

人々は轉住を考へ、將來を計畫する

兩も風も將來も轉住も念頭がないAさんは

来る日も 来る日も釣つてゐる

小魚が糸を引けば微笑みながら……

砂風

風は悲鳴をあげて……

さサツ—— さアツ——と来ては

ピユ—ウウウ—— と去つてゆく

砂塵を卷上ては窓ガラスへ投つける

いたづら小僧のいたづらの如うに

窓外のがム樹は非道の主人の鞭の下で

ふるえてゐる奴隷の如うだ。

x x

茹卵、オレンヂなぞの辯當を用意して

復活祭のピクニツクを樂しみ待ちし

昨日の今日を風に奪はれて……

ことし三つの姪は泣いてゐる

約束した叔父の私はなだめ疲れて

パイプをくわえたまゝ、ぼんやりと

窓外の砂風を眺めてゐる……

(四月一日)

工廠の隅から

マツイ・シユウスイ

今朝も ^{ボース} 主人振る見苦しい顔だ

若い小僧が大聲で跳ね廻つてゐる

井の中の蛙の如くに。

僕は黙々と胸に苦笑しながら

戦禍と云ふ不可避の周囲と

日本人と云ふ特殊民族で

總てを超越視してゐる。

工廠内には

幾多の人種が白人と云ふ名稱で

たつた一人の俺を給仕にしやうと争ふ

見れば盲腸が痛くなる。

中には退役兵 不具者 低能児も居り

戦時と云ふ大きな看板を肩にして

威張りに威張るその恰好

僕には解らない それが

謂る新体制の優越感なりや？

僕は幸に

踏みにぢられても枯れてしまはぬ

生きたる特殊性と意氣地がある

それでいいのだ

この我等たる我等の特殊性……………

見苦しい顔よ

知るに知れない正體

僕は死にかかつて

力つよい息を吐いてゐる。

童謡

私の犬^{ワン}

シカゴ

中村千代子

(1)

シカゴの町のおもちや屋の
たなに生れたこのパピは
去年のぐれに買って来た
今は私のペットなの。

(2)

はなとお耳はまつ黒で
小さな尻尾も眞黒よ
抱いてよくよく見て居ると
お目めはチヨツピリ片チンバ。

(3)

雪^{ユキ}のやうな白い毛に
赤のりボンはしやれてるが
昨日からごはんたべないで
まよつて居るよなお顔だわ。

(4)

シヨンボリ立つたの見てゐると
おチチをねだつてしかられて
ヨロ／＼出て来たかつこだわ
ほんとにお前はかわいいのね。

(5)

私はこんなに可愛いのに
プチはとき／＼おこるのよ
おこるとお目めはヒガラメで
私をギロ／＼にらむのよ。

(6)

そつと頭をたたいたら
かわいいおめめになりました
さあさあだつこしてあげよ
黒いお耳をなでてあげよ。

(7)

呼んだらかわいい尾をふつて
ヨチ／＼かけつて来るよう
とき／＼呼んで見るけれど
お前のお足はうごかない。

(5)

閑寂

親の譲りのそこばくの
田畑守りて安うけく、
故郷の地に生送る
もので幸なる。

牝牛は牛乳を 野はパンを
羊は衣の料あたへ
夏は涼影つくる樹を
冬は薪とし。

身は健やかに 平和なる
心のまゝに年月は
いつとは知らに流れゆく
幸なる生命。

アレキサンダー・ポープ作 (英詩集)
常石 芝 青 譯

夜は安眠し ほどく
文讀み憩ひ 戯れつゝ
聖き想ひに耽る身は
罪なくめでた。

我もかく生き 世に知れず
嘆かれずして死なんかな、
奥津城どころ墓石だに
無きこそよけれ。

註釋 ハート マウンテン在住の
常石 芝 青氏發行の「芝青
詩歌集第一巻譯詩集」よ
り抜萃せしものなり。

句俳律由自

三輪車

春の汚れた窓ふいてきれいになつてゆく空

三輪車など放つたらかして眞赤な落日が遠山

夏めくものの影も三輪車ふんで行く

家並が夕べさつきまで聲のしてゐた子をさがす

庭に一寸ち毬が落ちてゐた春の日くれてしまふ

まだ夕明りの空に風、の糸引いてこども

春は夕星の雨やんだ水溜りにもあるやうな

送られて出ておぼろ月がある静かな愛情

ポケットにナイフは忘れては来なかつたねこやなぎ

大月喜三郎

句俳律由自

麦の穂

麦は穂のふくらみ見せて青い風吹く

吹いても鳴らなかつた麦苗が偲ぶふるさと

細徑ゆけばあちらから蝶々こちうからも蝶々

両隣加州へ引かへした私だけの下駄作り

大根花ざかりバッタのぬけがらを見つけて屈む^{かひ}

ごきげんよう。又見送つた可細い夕月

陽ざしは恰度茶摘唄きく頃のふるさと

年寄れば郷愁のつり来る草餅なぞ

のぞみ叶つて稼入る春夜も満月

朝顔手を求めてのびる、手をつくつてやる朝

そろそろ團扇も見えてる追弔會の線香

隣家も空家となり矢車草の黄白

菊苗を貰ふ、そこのおばさんの廣島訛り

若い嫁さんで日本式です縁茶おひとつ

―釋尊降誕花祭―

甘茶はとにかく花は色々のなむあみだぶつ

波春 内木

卯月歌會詠草集

(順序不同)

木下落葉

茸採りにゆかむと今朝を老い妻は心細なくはしやきてをり。

初對面の握手交はしつゝ親しやも名のみ久に知りぬし歌友と。

センターゆ旅立つ君や二世子の行くべき道をしかと見つめつつ。(轉出の知友を送りて)
熱きもの胸に迫り来はるけくを旅行くといふ君を送りて。(同前)

高橋東民

ねむごろにおとづれませし歌友ともみたり三人病む身に沁みて得忘れがたき。

歌友どちの集ひに洩るる憶うろみをば慰めむとや寄書賜ひぬ。

温き歌友の心情こころのこもる花束色はなとりどりに香り放つも。

癒えよとの厚き祈りの歌友どちへ生命をかけて應こたへざらめや。

児玉なを

偉^{おほ}き人にはかに逝きぬ今日よりは平和にいたる時機^{とき}ぞあらしめ。

燃えつくすまぎはの灸の熱さをば息つめて吾れは背に堪へてをり。

老い人がたゝふる灸を今にしておのれ味はふ身とはなりつる。

野宿して去^いにしか今朝を焚火のあとあらはに寒し前の浮洲に。(コロラド河畔)

コロラド 安井 静女

街路樹はよたび木の芽のふくらみぬ引かれし夫を待ちわびをるに。

孫の顔思ひうかべつゝ小夜更けを小包作る送りやらむと。

友の給^たびし小包嬉し紐とけば干飯^{ほしめ}の菓子甘き香放つ。(キャンピング)

クリスタル市 川原 八重子

軽率なる吾が性故に思はざる過ちはしぬ恥ざらめやも。

疎ましき吾性なりと今更らに五十路を越えて思ほゆるかも。

豊けかりし此處の生活^{たつき}にもしかすがに物質の不足やゝに未たりぬ。

戦況ニユースきゝて戻りし吾が夫^{つま}の面^{おも}のくもりに言問ひかねつ。

リバサイド 廣戸 静香

外部に轉所するを祖國に不忠なりと去ふ人ありと聞きて、

胸ぬちにたぎつ思ひはあふるれど今日ももだして畠たがやせり。

おのおのに信念をもちことなる時なれば、ひたにもだして我道行かむ。
明日の日の生活思ひつつ、今日も亦ホー採り豆の畠打つ吾れは。
酒吞めば泣きつつ、戦死の子を語る隣ひとの主人の姿さまいたましむ。

永瀬正臣

あひつぎて友等此處より出でゆけば、こころおのづとしまるを覺ゆ。
白き齒なみ羨まれたる日もありし、その齒ぬかせて吾も老いゆくか。

ローズベルト大統領の死二首。

春の日は斜となりて、アドビルの庭に半旗は垂れさがりたる。
衆望もて四度よたびのぼりし國司くにつかさの今日の訃報は國民たみら嘆かむ。

大園晴子

目の前の丘に立ちたる虹の輪を趁ひて見知らぬ野を越えゆきぬ。
行きゆけどなほ消えざりし虹さやに、今も眼前めさきに浮ぶ心地す。
見も知らぬ野道を来れば、アモンズの花盛りなり櫻かと見し。

貴家未ま子

あさりゐて友にはぐれたり、深山路におおいと呼びて耳すます吾れは。
谷間やまひに幾世経りけむ古株の、その鉄の木を同胞ひと挽きてをり。
歩あゆみたる路かへり見て、幾何もはかどりをらぬに、力落ちむとす。(歸路)

シカゴ 矢形溪山

發車の警鐘にいそぎ離れゆく兵の子はプラットホームに影淡くなりぬ。
春雨にぬれて散りしける黄の花を踏みつゝ今朝はゆく輔道かな。
寒の嶋鳥を呼びつつ雄雀は興えし餌さを啄まずまちをり。

北林静江

唐胡麻の並木の道に音立てゝ古實がひとつころがり落ちぬ。
水上にさわげる児等のしぐさかも根こそぎし藻があまた流れ来。
子を征かせ寂しみをるに吾娘も亦その夫を今日召さると言ふか。
國と國撲ち合ひつゞく今日の午后大統領は死に給ひたり。

川口静洋

百千度かたくなの性ためけるも心そむきて吾れをなやます。
すなほなる性持つ夫は平安からむ三十年を吾の羨み来しもの。
散華し子を偲びて人は何氣なく宣らさむとすれ聲ふるひをり。
使命ある吾れと思へど次々に友出で行くに堪へがたきかも。

鈴木緑松

我が宿の庭に植ゑたる白樺は枝葉繁りて良き日陰すも。
血を誇る日系兵は義と愛とに相挾まれて苦しかるべし。

義に勇み矢丸飛びかふ戰場に消えゆく兵の心痛まし。

赤松傳代

中くりなく今日を歸り来て笑顔見する吾娘を思へば久しかりけり。(升リヌターの休暇に吾娘帰る)
召されゆくまぎはの別れ微笑みつつ吾子は人々と握手交はしをり。
兵營に向ふバスの上に此の夜半の寒さを吾子は如何に居るらむ。
兵營に着て行きし子の服のみが今日吾が許に戻されて来ぬ。

柳本錦子

文ごとに所うながす娘心や親の立場の判かぬが愛し。
ここにしてたゞ一筋に自が好む道にいそしみし人をもしむ。

永瀬勇

乾されたる池跡の窪風あたらず冬日ぬくぬくと吾が横切りゆく。
野司に見放くる晴れやなみよろふ山、山の奥になほ高嶺あり。
みなぎらか光りあたたかし野の遠の木末薄青くうちかすみつつ。
あめそぐ庭のポプラの新若葉葉毎にぬれて夜の灯映れる。

〔前掲掲載、猿渡則子女史の作品短歌中(7頁)誤字がありました。左の如く訂正致します(編輯部)〕

(誤) 夕日は輝きそめつ天の原ひろきに浮ぶ雲一つなし。

(正) 夕月は輝きそめつ天の原ひろきに浮ぶ雲一つなし。

後記

今日から向ふ三日間、青少年大會記念の「手藝展」と其れから今日は「軍人家族慰安の夕」と云ふ此の二つの大きな催ふしが持たれる事になつてゐるので、いきほひ其の方の手傳ひの爲め、殊に後者の「慰安の夕」は、ホストン婦人會の主催USOの後援と云ふので婦人の方々は其の準備に忙殺され、止むを得ず午后からの吾々の歌會に連ることの出来なかつた方も数人あつた様である。其れから昨今殆んど誰も彼もと言つていゝ位侵されてゐるヘイファイアーの爲め欠席された方もあつた。特に歌會始まつて以來熱心に勉強を續けられて來られた外谷さんが少しお加減が悪るくて入院静養中にて出席ならず、其れや此れやで今回は大変寂しい歌會であつた。唯一とつせめてものなぐさみとなつたのは既に久しく作の發表なかつた高橋東氏より態々玉稿を寄せられた事であつた。ポ文に氏の作が見えなくなつてもう年余になるかと思ふ。全く又振うだ。併し愚生は或る機會を與えられて他の短歌雜誌の上で氏の作品には其後もずつと接して來てゐた。氏の撓まない努力は矢張り報はれて最近の進境ぶりには目覺ましいものがあり、ひそかに悦んでゐる者である。今回當歌會に寄せられた氏の一連の作も佳作揃ひだと拜見した。病床にありながらも熱心に勉強を續けて怠らない歌友を見る時、吾々健康体である者はもつと眞剣になつて勉強せねばならぬと思ふ。唯有邪無邪に時を空費してゐては何時まで経つても實績は上らない。反省を促し度いところである。尚ほクリスタル市の川原夫人並びに先達つてコロラドに轉出された内堀氏より音信あり、歌會の諸兄姉元よろしくとの事なれば此處

に誌上を借りてお報らせするものである。ポストンの暑さも漸く本格的になりつゝあるやうであるから、病床に在られる方々は一層注意あるべく、又健康な方々もよく注意されて暑さに敗けぬやう、其して斯道に精進努力あらむ事を念じつゝこのペンを擱く。
(四二八、夜半 記ス)

釋 迢 空 氏 の 歌 拾 首

門 中 瑣 事

を止め子の守りしくりやは、蛭刺鳴き 冬菜凍みつき、秋冬を經ぬ。
こと足らぬ病ひの牀に、妻をおきて、棄ててかへらぬ 汝が名宣らさね。
をみな子は、すべなきものか、病みて子を産み、憑みし人は 家に來らず
をみな子は、寂しかりけり。身の壯りふみしだかれて、なほ 恋ひむとす
寢し夜らの 胸觸る時の、身に染みて忘れぬものを、あはれと思へ。
わが家のくりや處女は、赤ら頬のすこやかにして、汝に思はれし
八年まで 叱りきためて、かひなさよ。この たはれ男は 移らざりけり
世の相に 思ひ深めよ。ありありて、我が心を知ること ありなむ。
必も 親の 子思はぬ世なりけり。ひたぶるに 人は 恋ふべかりけり
まことあることはを 汝は 恋ひにけむ。安房のみ崎の里 別れ來て、
此の門中瑣事の作品は三十八首からの連作から成つてゐる。頁の都合上此處では只其一部を紹介するのみであるが誠によく一篇の小説をでも讀む様な感のする作品群である。先生の教え
子と先生の厨女との間に起つた恋愛悲劇の一面を詠まれたものである。

選後隨錄

何よりも先づ前辨（ホ文五月辨）の選後隨錄中に於て成した愚生の大きな間違ひを訂正すると共に愛讀者の諸賢に對しお詫びして置きたいと思ふ。作者に對しては早速葉書を以つてお詫びの言葉を送つておいたから既に承知でゐて下さるものと思つてゐる。あの隨錄中後者の作「名もなさず」の一首に對する拙評の一節に 大西郷を戴いて戦つた白虎隊の塚云々である。あれは白虎隊ではなく、大西郷の教へた子弟 所謂私學黨の一隊である。其の塚のある所を詠まれたものと想像して評したのであるが足らぬはないう愚生の一つの癖として大西郷を聞かされると次いで思ひに浮かんで来るのは白虎隊の事と彰義隊の事である。此の三つは何れもよく似た様な性質の事件であつて其の中のどの一つを聞かされても此の三つを思ひ合はすのが愚生である。勿論愚生の浅學なるが故に此の間違ひを成したので 今更ら大いに恥入る次第である。此處に訂正して作者並びに讀者諸賢にお詫びするものである。尚ほ今一つお断りして置かねばならぬ事は 今回の歌會詠草集中 作其のものとしては大變佳作だと思つたものの中に二三首 時節柄故に發表を差控へた方がよくはないかと思

つて そうした事である。 惡しからず作者達の諒解を得たいと思ふ。

輕率なる吾が性故に思はざる過ちはしぬ恥ざらめやも。

自己を反省されて成つた作である。 歌意は今更説明を要しない程明うかである。 斯ういふ作は或る年齢に達しないと仲々詠めないもので、又讀む方も矢張りあまり若いと充分に味はひが汲み取れない憾がありはせぬかと思ふ。 前述の如く愚生も大きな過ちをしたので、此の作の味はひはより以上に感受する事が出来る。 此の作者は唯其の性の輕率なるを嘆いて居られるのであるが、愚生の失敗は性の輕率と淺學な爲めとから起つたもので、其處にもつと大きな嘆きがあるのである。 賢明な作者と愚生とを比べてものを言つた事ををゆるして頂き度い。 此の作落着いた、そつのない作だと思ひました。

百千度かたくなの性ためけるも心そむきて吾れをなやます。

同じく自己を反省されて成つた作の一つである。 作者は異なるのであるが前言つた如く矢張り年齢は略くよく似て居られるかと思ふ。 斯ふして自分と云ふものを内省して、そして其の人格を磨いてゆかれるところに尊敬すべきものがあると思ふ。 つねにこの心がけをもつて世にのぞんだならば過ちはないであらう。 吾々の大いに學ばねばならぬところである。 佳作と思ふ。

俳句

夏雜詠十四人集

鶴嶺湖の山田如骨氏より贈り
下されし句集 鶴山より

岩下蘇村

高原や起伏り果てり雲の峯

夏の月大湖のあとのキャンプ村

森山一空

すゝみなづむ自轉車の子や夏嵐

岩山の白十字架や雲の峯

矢野紫音

隔離所にある佗しさや晝寢覺

日盛りのあかき溶岩道行くひとり

田中素風

丘に立つ監視の塔や夏の月

打水に貝殻白くあらはなる

保田山晴風

三枚の板でこと足る日覆かな

奥深き加州の山を雲の峯

今村桃村

水打つや庭の玉砂利浮き立てる

シヤスターの姿しづもり夏の朝

山田如骨

打水の手に郵便を受取りぬ

灯を消して話す端居や夏の月

池永肥州

貝堀りの一群ありぬ南風吹く

日覆して机の位置をかへにけり

大館無涯

囚はれの旅いくとせや夏帽子

空を衝く孤嶺の雪よ夏嵐

藤井丸應

蟻の道柵の外までつゞきけり

炎天や農夫ひたすら培へる

中谷松畔

新調の夏帽輕し夕散步

船を待つ人岸に在り雲の峯

鈴木黒光

盆踊り今宵も老いの留守居かな

水打つて夕餉のあとの端居かな

山本涸川

三里野に松一本の日蔭かな

荷を提げし老の憩へる日覆かな

十一歳 岩下睦子

組々の駭け足の聲夏の朝

夏朝や涼風うけて深呼吸

俳句 春 雜詠

吉里世耳

マスキドの遅速の芽生へ春の雨

釣の徑失せかゝり居り草青む

沁り来し牛の通路春の水

庵の葺切つて造りぬ風の骨

スイトピーに目を休ませてタイピスト

春愁や密に集ひ聞くニユーズ

俳句 晚春 雜詠

トバズ 島本巽村

大星の一つ墜ちたる春の闇

雉子翔つや矢鏃深しの行くなべに

温り雉子いよく野火は迫りしぞ

硯彫りそれにも人輪暖かき

満座那吟杜句抄

木村白嶺

視野遠く去りし飛行機木の芽晴

春惜しむ巨樹の高根に腰かけて

畑中に赤き農具や春の風

風塵のおさまりし夜を鳴く蛙

村上聖山

春風や女工出で入る鑊の門

芽柳の水すれくになびきけり

春風やぼつ／＼咲ける花林檎

山崎瓊瑠女

達磨彫る人に育ちぬ柳の芽

居ながらに遠嶺の雪や木の芽窓

土村若舟

一群の羊よぎれる木の芽道

かける子を追ひゆく犬や木の芽道

望月奇風

浮き出でて強く水蹴る蛙かな

牧牛の中の仔豚や春の風

山口牧村

病める日を重ねし窓の木の芽かな

春風や轉住箱を造る音

山田天民

春風や果樹の花びら其處此處に

漫々と池水湛へて木の芽かな

土屋天眠

土を割る瓜のニタ葉や春の風

羅府を訪ふ友の誰れ彼れ木の芽時

惜春の賦を吟じつゝ野路の人

夕闇の音羽の池や鳴く蛙

有川佇生子

輕装の人ちうほらと春の風

マンザナに育ちし吾子と春惜しむ

永井翠敏

イづめば犬もイづみ春の風

擴がりて消へゆく雲や木の芽窓

椅子に寄る老や静かに春惜しむ

母のみに夜は更くるなり遠蛙

ポストン川柳

第六十三回川柳句會

課題「心配」

山本竹涼選

選並ニ添削及ビ批評

註

今回は北米柳壇の泰斗たる、

山本竹涼先生に願つて氏の選並び

に一句一句添削して貰つて掲載した。

然し先生の添削に依つて原句が劣

つて居ると云ふのではないから添

削句と對照して斯道向上の参考に

せられたい。

潮風

△原句 ○添削句

天位

星野光葉

心配の顔が集るヘドライン。

地

位

・鶴湖・竹原白雀

Vメール封を切る母の手が震へ。

人

位

谷本晚香

時局下も心配知らず子等は伸び。

佳作

新屋軟葉

△それぞれの惱があつて柵の中。

○それぞれの惱があつて柵に老い。

関五松

△存亡の修羅場となつた母國の聲。

○存亡を賭して戦ふ故國の聲。

△ふつつりと戦地の子からたより絶へ。

○Vメール戦地の子から一度ぎり。

△初産が間近くなつた里の母。

○初産が間近くなつて母が来る。

星野光葉

△心配はないと主治醫が軽く立ち。

○聴診器心配ないと仕舞れる。

沖本かもめ

△征し子の安否氣遣ひ待つ便り。

評 親として當然である。氣遣ふ親

の動作を入れて再考。

△再轉の明日へ苦になる生活道。

答 出所見合すべしと云ひ度なる。

(再轉となればの先を考へる。)

瀧川巴水

△心配は心配として任すもの。

何を任すか不明。

○成行に任せて作句日々樂し。

山西里江

△激戦のニユースへ痛む母の胸。

○激戦のニユース母には聞かすまい。

として孝心を現はす。

△あきらめて居て氣にかゝる子の検査。

○あきらめて居ても氣になる子の検査。

△怪我と云ふ知らせに母は寝つかれず。

どころか書夜心配すべし。

○怪我といふ知らせに母の面やつれ。

森岡春山

△子の名呼ぶ聲夕暗の軒傳ひ。(可)

○子の名呼ぶ聲夕暗を筒ぬける。

△讀み終る鼓胸騒ぐVメール。

○Vメール封を切るまでの胸騒ぎ。

山内狂月

△英字紙のニユース讀んでる顔の色。

○英字紙のニユース何だと覗く顔。

△出所後の身の振り方と子澤山。

○出所して皆向き／＼へ子澤山。

早川貴美子

△心配は母もして居る二十五字。

着想可、但し母が子を思ふ事は子が

母を思ふ幾倍、然るに母もとは軽い。

二十五字母の心配讀む渡。

として、母なればこそと云ふ氣持ち

を現はしたいが未だ充分でない。

△空襲を受けた故郷の父や母。

○空襲を受けた故郷の父母の夢。

△心配をさせまい母に殖へた皺。

○心配をかけてはすまぬ母の皺。

北村子守

△戦場となりし故郷があんどられ。

当然である。左記の如くあんどら

れる對照を明かにした。

○戦場となりし故郷の父母の事。

△燈火を消して寝ても浮ぶは新戦場。

○灯を消して尚眼に浮ぶ新戦場。

新屋敷葉

△閉鎖令苦難豫期して西に向き。

○閉鎖令苦難豫期して西東。

△母の氣を他所に出所の娘の氣性。

○親の氣も知らず出所を娘は願ひ。

吉村芳乃

△病狀を醫師に尋ねる母の顔。

○病狀を醫師に尋ねて母思案。

△オバシーする子守つて夜もすがら。

○オバシーの寢た間も母は眼に浮べ。

堀内狂雨

△激戦の度に悩ます出征の子。

○激戦のニュースへ祈る子の武運。

遠水白舟

△戦場の今日はどうかと子の姿。

○戦場の地圖へ追ふてる子の姿。

△重傷の報知に一家顔が集り。

○重傷の通知に一家の暗い顔。

△オバシーへ親の心も知らず起ち。

○オバシーへ親に知らせずそつとたち。

津村汀村

△手術臺刻々迫る醫師のメス。

○メスの所へ只信じ切る手術臺。

△不安なる時局へ祈る平和の日。

○日^{ニケニケ}々の倅^{ササ}を祈つて待つ平和。

竹原白雀

△戦況を覗く新聞腹が立ち。

○読む者と読まれる者へ新聞紙。

△思ふまい思ひに知らず朝の窓。

句意不明

△毎時の時計短波へたしかめる。

○腕時計レデオ時間へたしかめる。

鈴木緑松

△信念に生きて心配知らぬ母。

○心配に生きて氣強い母の日々。

△戦場に無事な笑顔の子の寫眞。

○子の元氣寫眞を添へた軍事便。

△病床の孫へ不安な急救車。

句意不明

△病む母へ秘めて征く子の安からず。

○病床の母へ黙つてオバーシー。

△假宿に心配しらず子は育ち。

○假住居娑婆知らぬ子の育ちぶり。

谷本晚香

△心配をするなど軍部機會待ち。

○心配をするなど軍部にある自信。

安井靜女

△三年を心配せずに養はれ。

○三年を故國へすまぬ徒居佳食。

△六十年なす文けはした子に任せ。

○子に家業継がせ六十路の悔もなし。

△百姓に心配いらぬ土ほじり。

○百姓に何時でも行ける鉄に馴れ。

堀田瓢池

△歸還する子等に心配ついて行き。

○歸還する子等に細々注意する。

△心配が背負ひ切れずに節逝き。

○心配が背はれずとく／＼親は逝き。

竹本芳公

△心配に白髪をへてる轉住所。

心配のせいにしておる白髪凍。

藤井孫六

必勝も信じ切れない眉をよせ。

必勝も信じ切つてゐる濃い眉。

悔悟してすつかり消へた氣の惱み。

悔悟してからすつかり能く眠れ。

特選

鶴湖 瀧川巴水

他人事でなく足元へ来た飛火。

軸

心配も口ほどでない好い軒。

選終へて

一般に推敲が足りないやうに思はれます。能聖芭蕉翁は一句出来たら發表するまで之を千回口に唱へてみると言はれたとの事、故鬼堂君は席題披露の場合でも開口一番舌頭三轉する事をお忘れないやうにと能く言つた。

自分の出来た句を繰り返し四五回讀

むと必ず假名遣ひや上五と下五をとり替へたらなど、氣付く事が多い。殊に何等の制限もない自由な川柳では口語も文語も俗言も方言も勝手に駆使して可としてあるのですから舌頭三轉して聽覺的音樂美をも具備せしめる事は其鳴を感ぜしめる上に於て効果的であると思ひます。そこで今推敲について次の如き例を書きました。多少とも御参考になれば幸ひ御笑覧までに今私は左の句を得ました。

孫に肩叩かせ祖母の日向ぼこ。

併しもう少し祖母らしく年輩も現はしてみたいと努力して更に、

孫に肩叩かせ祖母の丸い背。

處が茲に考へる事は孫から云へば祖母、祖母から云へば孫である。僅か十七字

の中に祖母と孫と重複させなくとも一方は内容に入れて出来るゝ推敲の要を感じましたので、

孫に肩頼めばお菓子ねだられる。

大に成功した積りでありましたが、考へてみると親の背でも只では叩かぬと言ふ世間の不心得者を联想して宜敷ない。即ち句器がない事に氣が付いたので、

肩叩く孫の力を嬉しがり。

之で一先づ川柳となつたと考へました。が併し『嬉しがり』とトコトンまで言ひ切つては味も蓋もない。詩でない。

願くば祖母の嬉しがる姿態を句の内容に盛りねばと最後に、

肩叩く孫の力へ眼が細い。

に改めて稍前句より良い川柳になつたと思ひましたけれ共、之で充分とは言へません。此先を皆さんと共に更に／＼

推敲して見たい。小田夢路さんの句に、
涙ぐむ父とは知らず肩を揉み。

眼を開じて此句を舌頭三轉してみても
さい。そして此境地に到るまで吾々も
御互に努力致しませう。(終)

第六十四回川柳句會

課題「意外」

清水迷舟選

天位

瀧川巴水

あの人の説とは遠ふ出所の荷。

評 出ない覺悟を搖がす風が肌へ

涼しいハマの音。

地位

山西里江

此處ならと思ふた耳へ筒の音。

評 瀧路申斐なく出て行けがしの音

が氣になる農繁期。

人 位

竹原白雀

インタニーの顔には過ぎた父の顔。

評 記念する氣じやなかつた髭は妻

や子供に會へるまで。

客

生還の奇蹟を語る紫心章。

藤井孫六

戦況の意外へ更ける涼臺。

吉村芳乃

比島からまさかと思ふVメール。

早川美貴子

こんなではない筈だつた表門。山内狂月

をやくの握手同志へ灯がともり。安井静女

佳 句

(清書順)

十萬の耳へ意外な解除令。

早川美貴子

感情は意外に好いと云ふ便り。

同

軍人が掏摸とは知らぬ汽車の旅。

速水白舟

取り寄せたトロコ空のまゝで着き。同

ホーボの群に意外なふ仕合。

同

御大の訃報まさかと聞き直し。

龍川巴水

道連が意外で嚙柵を越へ。

星野光葉

クレオン画意外なところに耳があり。森岡春山
入院の二年意外に伸びた幹。同

最後まで居残る肚へ閉鎖令。山西里江

轉住所意外の友と夜を更かし。津村汀村

弱虫で通つた友の肚が知れ。北村子守

我妻の何所で習ふた隠藝。同

平和待つ柵に意外な閉鎖令。沖本かもめ

保護だとも言つたキャンプへ閉鎖令。関 五松

愛嬌で向けた笑顔を疑はれ。同

三才へ思ひがけない句がはいり。同

パの顔出てから知れたプログラム。安井静女

オーバーシー生れ変つた子の手紙。堀田瓢池

收容所意外に目立つ子の背丈。鈴木緑松

たまさかに會ふ日意外に短かすぎ。谷本晚香

軸

排日で知られた庭に八重櫻。

(以上六十六句中二十九句の厳選)

紙上互選

課題「やり直し」(高点順)

今度こそ儲けて見せる種を蒔き。関 五松

投げ出した駒をも一度置き並べ。同

幼稚園先生笑つてやり直し。島原潮風

醫師を更へ又盲腸の再手術。同

チンクトリー坊や幾度もやり直し。稲垣秋月

政策をやり直してゐる歸還令。同

建設に一家揃ふてやり直し。星野光葉

やり直す決意で別れる收容所。竹本芳公

更生へ拓士となつてやり直し。谷本晚香

國力でやり直し行く世界地図。同

沿岸に再び基礎を血で築く。星野光葉

建設へ又やり直す血の誇り。同

やり直す選挙は元の人へゆき。吉里竜耳

足並へ又やり直す運動會。同

再建へABCからやり直し。同

先代と趣味変へて見る池と山。鈴木緑松
失敗に懲りて設計やり直し。同

同 「入智慧」(高点順)

宿題は母と二人でやつと解き。竹本芳公

コート着せながら吹き込む妻の智慧。田代静枝

入智慧を見透かされそな瞳の動き。島原潮風

入智慧は詠ひ詰められて膝をもみ。関 五松

世の動き子から入智慧される事。谷本晚香

入智慧が過ぎて基客は迷ひ出し。鈴木緑松

入智慧は大事なところで行詰り。田代静枝

入智慧で考へ直す煙草の輪。小池昭二

入智慧の次が續かず搔く頭。吉里竜耳

入智慧へ急に元氣を盛りかへし。稲垣秋月

入智慧を近くに住んで里の母。同

強がりと言ふて裏に兄が居り。同

證言に辻褄合はぬ借りた智慧。星野光葉

入智慧をつい口に出す酒の酔ひ。同

嫁ぐ娘に母は母での智慧をつけ。塩田柳盛

入智慧で漸く出来た禮を述べ。竹本芳公

入智慧の妻を褒めてる夕の膳。島原潮風

入智慧の甲斐がなかつたへ。將棋。同

いゝ智慧を貸しさう。髭の友が来る。同

かけ引きに子の入智慧も役に立ち。塩田柳盛

耳うちをされて態度が改まり。小池昭二

こうしたらどうかとしぐさして見せる。田代鶴枝

惑心に人真似上手猿の藝。津村汀村

父さんを誑かる智慧を母が入れ。関五松

入智慧が見事に敵の裏をかぎ。吉里竜耳

入智慧が證言臺に疑がはれ。星野光葉

轉任の子に入智慧も親心。塩田柳盛

入智慧が勝目となつた訴訟沙汰。吉里竜耳

入智慧で人に後れぬ子に育ち。津村汀村

入智慧をしてやりたさう子の立場。谷本晚香

入智慧は矢張りどこか物不足。同

入智慧は話に合はぬ受け答。鈴木緑松

推敲と佳句

川柳道に精進して募集句に應募するに當りては、先づ想を練り、次に修辭を考へ、而して後調子を整へ尚二考三考の後文を投句すべきで、惛然と言葉を五七五に並べたのみでは川柳とは言ひ得ない。況んや言葉で整はず只言葉の切端の如きものを出しても、三才入等は難中の難である。投句者の推敲(詩の文字を練る事)を切に希望します。今月は私の添削「皺」「影」「指」は頁の都合で載せられず、次第に載せます。尚今回から餘白を利用して「僕の川柳初歩」(坂本田草若先生の添削)を載せます。御参考になれば幸甚也。○藤井孫六氏、北林靜江氏、竹下ゆづる氏(シヨゴ)よりの御寄附を感謝します。

僕の川柳初歩

昭和十二年五月故本田華芳先生が、

初歩添削講座を初められたので、早速作句して出したのが「母」と云ふ題で五句、其内で四句はどうやら川柳になつてゐてパッス。唯一句丈け餘りにありのまゝ、過ぎる憾があるとして、

原句「肴^{サケ}の骨とつて母は子に與へ」(潮風)近頃北米柳壇で流行る「も母」を使つて添削されたのが、

小肴の骨も氣にしてやるも母。

其時代は只十七字に纏つてさへ居ればよいと思つて出して此爲体。然し今頃の方は皆五七五で詠んで居られるからと旨い。

今度は狂句 其第三回目の「金」の題で、今度こそは先生のお褒めに預からうと矢鱈に作句して出したのが七句、之が狂句IIであつた。

今其時の先生の驚き振りを紹介する。

「母」と「子供」は投句家諸君が最も眞剣に力作して一句も狂句じみたものが見當らなかつたから、次の「金」も屹度皆眞面目に詠まれるものと期待して居つたところ、意外／＼にも、

金入れの重さに軽く立つ女給。

紀の國屋金のなる木を見つけ出し。

忠兵衛は使ひ果して二歩残し。

借金に追はれて道に踏み迷ひ。

仇にもなれば味方になるも金。

命より金が大物なお婆さん。

コレアルか丸を作つた支那人め。

梅ヶ枝の手水の鉢は金入か。

(つづく)

○次回課題

「遺族」三句 山本竹原氏選 六月十五日締切

「反對」三句 竹原白雀氏選 六月十五日締切

○紙上 「外科」三句 六月十一日締切

互選 「半分」三句 六月十一日締切

○添削 「勝ち」



白百合

有田 百

三島社長の義妹、星銀子が米國留學のため、愈々春洋丸に乗りこんだ。この確報が傳はつたので、社内は只ならぬドヨメキを見せた。獨身社員胸の中には、未だ見ぬ銀子を、色々と美化して想像した。或者は『女神のやうに美しく優雅だらう。』と云ふ。『社長の奥様の妹だからーマア知れてゐるね。』とも描寫する。が何れにしても明朗な話題だけに、社内の空氣は頗る麗かな氣分で漲つた。銀子は熊本師範學校を卒えて暫く教鞭を執つたが、更に東京目黒の女子大學を卒業して、憧れの自由平等の國、米國へ向つて航行中である。

入港日の電報が社長に届いた以後は、社内は一層活氣づいた。それは丁度各自が胸に抱く花嫁を桑港埠頭に迎へるかのやうでもあつた。

桑港日刊紙には『春洋丸一等船客』の見出の内に△星銀子(熊本)留學生。とインクも濃くプリントされてゐるのが目についた。

『確實だー君ー一等船客だよ。豪勢だナー。』と上谷が云へば、

『そりやー社長の義妹だよ。留學生様だ。一寸我輩共とは格が違ふからね。』と恰も側にも寄りつけぬかの様に、観念した語氣で、應酬したのが、年上の山

口であつた。

「社長は明朝出迎えに行くさうだが……社員一同から花束でも贈らうかね。」
と、饒舌家の上谷が提案したが、餘り反響がなく立消えとなつた。

数日後であつた。社員は銀子に挨拶するため、非常な期待を以て社長郎を伺つたのであつた。

「全く裏切られたね。」

餘りに期待が大きかつただけ、失望も大きい。上谷は更に語を續けた。

「あんな非美術的な婦人が、よくも米國に來たものだね。比島向きだよ。」

「至言々々。時に井上君は馬鹿に惹かれてるじゃないか。何とか言へよ。」

と山口は始めから沈黙してゐる井上に、ふと氣がついて催促したのであつた。

「諸君は實に慘酷だ。婦人に對する態度を根本的に改めなければいかん。美と謂ひ醜と言ふ。結局見る人の審美觀に任するより外にない。然し銀子さんから受けた僕の印象は、磨かれた心、教養の徳とも言ふのか、つまり心の美によつて、理智の閃きによつて、總てをカバーしてゐる。優やかで明朗。僕は敬意を表したのぢや。諸君の云ふ所の容貌の醜とは、僕には決して醜とは見えぬ。まあ餘り極端な批評は慎しみ給へ。」

「おや、出かしたぞ。銀子嬢の支援者、井上君萬歳だ。アハ……」
獨身社員の山口一次は三十。上谷五郎は二十七。井上俊夫は二十五歳である。

銀子は當年廿八歳、體量は百五パウンド。丈は五尺一寸。色浅黒く、口廣く、頬骨はやゝ隆起してゐて美人型ではないが、二重瞼の涼しい双眸と額の廣さが、彼女の睿智を物語つてゐる。

社長は田舎に事業してゐるために、市の住宅は銀子が殆んど留守居をしてゐて、米婦人の家庭教師について英文學を研究してゐた。井上は社長夫人の了解で、『井上さんとなら心おきなく交際して良いですよ銀子』との聲掛りがあるので、時折り訪問するのであつた。活動寫眞や芝居にも案内することがあつた。

眞夏の一日社員一同は長江サクラメント河畔に銀子を主賓にピクニックを持つた。長堤には楊柳が雜然と茂つてゐる。淵に近い樹間の程よい所に陣取つた。一行は各自恰好の場所で釣糸を垂れた。

大河の水の音も立てず、静かに流れく／＼て限りなく、流るゝ様は――

逝者如斯夫 不舍晝夜――無限の時を流れ流れて限りなく、幾億年の昔より、幾億年の將來に向つて流れ行く、『時』の流れを念ふ時、人の心は巖かになる。『静寂』の境地と謂ふか、大哲はこんな心境に接して悟入したのであらう。大悟したのであらう。

「銀子さん。長江の水の流れは實に悠久無限――而も静寂そのものではない。貴女のお感想は？」

「ホ……私の感想？。それはもう貴方がおつしやつたわ。」

突然、バチヤーと大きな音のしたのは淵に鯉が跳ねたのであらう。

「かゝつた——」。

と時ならぬ大聲で、糸を繰り始めたのが、例の饒舌家の上谷である。

「オ……引く——ズン——持つて行く——」。

糸は水面を斜に、細波を寄せて引かれて行く。上谷は糸を止めたのであらうか、銀鱗の大魚は、遙かな水上に、二度三度跳ね上り、白玉のしぶきは、時ならぬ美觀を添えた。

「デツカイ、ストライバスだ——」。

「逃がすナ——」。

一行は興奮してゐる。殊に上谷は蒼白となり、眼は釣り上り、「にがしてたまるものか——」と云ふ凄しい形相である。糸を緩めたり、引張つたり、凡ゆる苦心をして山口が、フツクで引上げたバスは、タツプリ廿五斤はあると見えた。

桑港通ひの真白い河船が、大波を兩岸に叩きつけて滑つて行つた。鷗が五六羽、悠々と船を中心にして、羽搏きもせず廻つては船について行く。夕陽は大平野の涯に落ちかゝり、遙かに見ゆるシーラ、ネバダの連峰は、薄墨色にぼかされてゆく。

「まあ——銀子さん——貴女が——それ——柳にもたれてゐる其の姿を、赤い斜陽が射して、大河に長い影を投げかけてゐる様は、天下の絶景ですわ——」。

「まあ、たんとお冷やかかしなさいよ——」。

「でも、その風情は眞實画ですよ。詩ですよ——」。

「ホ……………」

「女は―矢張り結婚しては、もう人生の半を終つたやうなものでせうね。」
と井上は處女美を、たゞえる意味で言つたのか、或は結婚すれば、早や人に
省みられぬ様になると云ふのか、突飛な問題を提供した。

「そんな問題は、私には解らないわ。」

チチ…………と小鳥は鳴きながら、枝から枝へ移り、暮れぬ間に罅を探すかのや
うである。

「もう歸りませうよ。」

と井上は言ひながら、銀子の手を執つた。

x

x

x

日曜日、井上は銀子を郊外の花屋に菊見に誘ふた。二人はホルソム街道行の
電車の終点で下車した。井上は電車の昇降には手を貸すことを忘れなかつた。

満苑の菊花は目も醒めむばかり美しく咲き揃つてゐた。二匹の白い蝶が、銀
子と井上の顔先を、もつれては離れ、離れてはもつれつゝ、何處とはなく飛び
ゆく。二人はその後を追ふやうに、視線を投げかけてゐた。

大輪の黄白数本を買つて歸つた。銀子は水上げして後、生花の鉢の音を響か
せてゐたが、やがて花瓶にさしてゐた。

「何流ですか、池の坊？ それとも……………」

「ホ……………自我流ですの。」

「へ、なか／＼よく整つてゐますね!」

「さうでせうか……」

銀子と井上の會話は、他愛もない話題で、菊花以外には出なかつた。而し廿五歳の青年井上は、熱心に銀子を研究してゐるやうでもあつた。

「では、今日はこれで失礼します。又何日か参ります。」

「まあ、いゝでせう。もう御飯の支度をします。私のお手料理を召上つて頂戴。」
豪莊な邸宅に、二人向ひ合つて夕餉の卓についた。刺身は副物の配置と相俟つて見事で食欲を大にそゝる。吸物も可し、飯はチト柔か過ぎた。

「素晴らしい割烹です。之では大宰も顔負けしますよ。」

「たんとお冷やかしなさいよ。少し御飯が柔か過ぎましたね。悪かつたわ。」

「悪くても良く解釋しての批評です。それは……」

「痛快なヒツトですね!。だが私は柔かな御飯が好きなのです。」

「では偶然のヒツトでしたわ。それはよかつたわ。」

「お魚料理ですから一寸失禮させて頂きます……」

と銀子は立つた。井上は辞退する銀子を押し切つて、皿や鍋を拭のであつた。

「銀子さん! 新世帯も當分の間はこんなものでせうか?」

「ホ……知りませんわ。日本では此んなことを男子の方にして頂いては、女の恥としてゐる習慣ですからね!。それに男子が馬鹿に氣取つてゐますからね。」

「ハア……日本男性に對する反抗ですか……」

「反抗では断然ありませんわ……でも時代の推移に従つて、習慣も改善しなくてはなりませんわ。」

「例へば……」

「さうね。それー奥様は大風呂敷を抱えてゐるが、旦那様は空手で、ステッキを振りまはして二三間先に行くなんてー寧ろ滑稽だわ。貴方さう思はない？」

「廿八歳の銀子の眸は微笑を湛へてはゐるが、真面目を物語つてゐる。
「ほんとに同感です。西洋人が相扶け合ひ、そして談笑しながら歩く姿は、美しいですね。」

「ほんとに美しいわ。改善すべき点は多々ありますわ。それには先づ帝大を女子に開放することも必要だわ。」

「賛成ですわ。男女の教育も平均しなくては、真の家庭の和樂も、向上もしないでせうからね。」

「時に銀子さん、僕貴女に提議がありますがね。」

「承りませう。何か知ら？」

「僕が家賃その他の生活費一切を負担します。貴女は家庭内の義務を盡すのです。つまり共同生活をするのです。如何ですかね。」

「そして其の目的となさる所は……」

「貴女も私も獨身でせう。而も日本は男女を隔離して教育するために、人生の重大事である相互の思想的『性』の相違を知らぬでせう。盲目であることは、

やがて悲劇の因をなすものと思ひます。この意味で相互に両性の研究と理解のための共同生活です。」

「井上さん。それは真面目のお話ですわ、それとも冗談……。」

「無論私は真剣です。私は二十五歳の青年ですよ。」

「お断はりますわ。それはね、岩野泡鳴さん達が傳統の習慣に反抗して、物する露骨な、即ち『靈が勝つか、肉が勝つか』と云ふやうな思想——自然主義的な——餘りに文藝的な事——お断りますわ。」

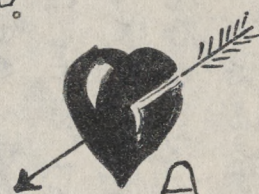
「私……真面目ですよ。熱心に希望しても……。」

「断然おことわりしますわ。それに世間の誤解を招きますからね。」

「一體、世間を考慮の中に入れては何事も出来ませんよ。近代の青年男女は階級制度に對しても、經濟組織にも、政治機構にも有ゆる方面に、もつと迫力ある突進をしなくては……改革を……。」

「誠に結構でせう。而し貴方の申込はお断りよ。私は保守的か知らぬけれど……銀子は頗る落ついてゐた。昨には熱愛に近い愛情が溢れてゐた。」

その夜、井上は自分が銀子に申込んだ事について再考した。如何にも少々突飛のやうでもあつた。『文藝的の事は——』と言つた銀子の言葉の裏は？、『美に憧れる遊戯』との意味だらうか。井上は自分の言動が餘りに輕率であることを告白したのではなかつたか？。など自問自答した。其の晩は妙に神經が尖つて眠れなかつた。(つづく)



A子の轉住

羽根政春

K君。

御轉住の直前御訪問下さつたさうですが、かけ違つてお目に掛れなかつたのを遺憾に存じます。

實は私も、君の戀愛事件はうすうす承知して居ましたし、其の當時は寧ろほほ笑を以て見忤らせて貰つて居ると言ふ程の氣持だつたのですが、今ここに斯うして御相談を受けますと中々速答の出来ない氣持になつて來たのでした。お返答が今日にまで引延しましたのは、私に熟考する時日が必要だつたからです。君は両親の反對理由を充分諒解して居られながら、どうしても此の戀を完成せしむると主張して居ますが、戀愛問題では君に限らず何れの場合でも、故障に逢ふと其の當時者の意志は反撥的に固くなつて來るものです。けれども卒直に言へば私は、戀といふものを若い者達が考へる程人生に於いての重大なものと考へては居ないので。要するに戀とは、男側から言へば或る特定の女が好きになつた事であり、戀が成就したと言へば好きな女と結婚すると言ふだけの

ことです。勿論好きな者同志が結婚する事は他に支障のない限り、そして他に支障を及ぼさない限り結構な事に違ひありません。併し君の場合は君の戀を所謂完成する爲に家庭に累を及ぼす所が餘りに大き過ぎはしないかと考へられます。君の御両親としては相續人である君の令兄が未だに妻帯せず而かも軍籍にあつて近々に前線に送られる事になつて居る現在、其の弟であつて而かも妻帯には若過ぎる程の君の結婚を今許すといふ事は親の氣持として出来難い事であらうと思ひます。たとひ君の両親がA子の人となりや彼女の家庭を色眼鏡を通して見る見方はかりしやうとも、君に人の親として感情が理解出来るならば、それを恕す程の氣持が起らねばならぬと思ひます。

現在の私の氣持では君の要求を其のまゝ容れて君の両親を説服する手紙はとうにも書けさうにありません。却つて、いゝですか、君に其の戀を捨てよと勧告したいのです。此の言葉が今の君に如何程慘酷に響くかを知つて居ます。併し總じて若い時は戀した相手を途方もなく過大に評價する傾向があります。年齢が進むに随つて其れが眞に浅薄な觀察であつたことに氣付くものです。夢中になつて戀して居た相手が数年後に再會して如何に無價値な者であつたかを見出す場合が多いのです。依つて以て君が今いとして居る戀愛なるものが頼りないものであるか、お解りになるだらうと思ひます。

君はまだ若いのです。その上今は両親の許を離れて或る官職に就いて居ると

いふから大いに勉強する機會を持つて居られる譯です。君は今戀などしてゐる暇はない筈である。或は戀などに苦しんで居る暇はない筈ですと言ひ直してもよろしい。世界の將來は大いに君達若い者に期待して居ます。大戦が終れば世界は到る所で君達若者を歡迎するであらう。或は突飛な夢かも知れないが、南洋あたりの總督にでもなる事を想像し、其の想像を目標に勉強される氣持にはなれないでせうか。

戀愛を渴いた時の一杯のソーダ水だとする考へ方もあるさうですが、私はそれ程の極端は言はない。唯君如き教養ある若者が戀愛なるものゝ爲に家庭を悲しませ又一生を誤る如き事があつては如何にも惜しいと思ひます。

篤と御勘考あらん事を望みます。

K君。

近頃御昇給なさつたさうで、勉強家の君の事、努力が報ひられたのです。お慶び申し上げます。

御返事が大分遅れましたので、先便の私の無遠慮な忠言がお氣に障つたのかと思つて居ましたが、君も亦私と同様此の問題には熟考する時日が必要だったさうで、さもありつらんと思ひます。で結局は私が危懼した通り私の意見に承服されない事を了解しました。併し君は先づ私が『獨身で居られるから戀愛を

理解されない』と言ふ先入主を取り除けて下さい。君が『彼女と結婚出来ないならば一生結婚する氣にはなれない』と言ふ揚言に對して私がどれ程君が現在眞面目な氣持でそれを言つて居られやうとも、その言葉が古來幾萬人かの戀する者に由つて言ひ古され、而も其の言葉通り實行した者が殆んどない事を言ひたくなるのは強ち私が獨り者だからではなくて思慮の未だ定まらざる若い者同志が戀だ愛だと騒いで居るのが如何にもあやふやなものである事を知つて居るからです。それから一つ君に取除いて貰いたいのは、君の両親が令兄の事のみ考へて親の手許を離れて育つた、歸米青年である君をひどく疎んじると言ふひがみの心です。よし他の場合にさうした事實があつたにしても、今前線にあつて身命を賭しての激しい戦闘をやつて居る令兄の安全歸還を陰膳供へて祈つて居る君の両親が、兄の歸還も待たずに結婚しやうとする君をひどく叱責した氣持は教養ある君にして諒解出来ない苦はなからうと思はれます。

君は今次の昇給によつて結婚後經濟的自立が出来る自信が出来たと言はれますが結構な事と思ひます。元々私は經濟的理由で結婚をためらつて居る人達に同意して居ません。結婚をして終へばどうにかやつて行けるものだからです。併し、だと言つて經濟的自立の見透しが付いたから両親や令兄の氣持に逆つてよいと言ひたげな君の考へは少し自我主義的に聞えぬ事もありません。

君は又將來の南洋總督を夢見て勉學して居たが、路傍に假寢して王様になつ

た夢を見た乞食のやうな自分を見出す日が遠からず來さうな氣がする。何日までも夢を追つて居るより乞食のまゝの生活をする方がよいと思ふやうになつたと言つて居るけれども、夢の話は常に大きな目標に向つて立つて居給へと言ひ度い私の氣持だつたのですが、君の夢が單なる夢で終るものとなすは、今日といへども速断に過ぎると言へませう。夢を現實化しやうとする大きな努力と功績とを私共は知り得ない地位にあるのですから。

實は其の後それとなくA子の性格や行動や部落の評判などを問ひ合せて見ました。想像以上に彼女が評判のよい娘である事を知りました。私自身としては君の結婚相手としての彼女に不足はないと思つて居る事を申し上げて置きます。唯君の再三言はれる如く、君達の戀愛が純眞のものであれば、二三年や三年待つとうとも君達の氣持に變化は起らない筈です。若し又君達の中どちらかゞ變心するやうな事があれば、勿論純眞な戀でなかつた事になるのですが、其の時は寧ろ自己の不明を愧ぢてあつさりと忘れ去る事が他の一人の執るべき方法であります。令兄の結婚されるまで、切めては彼の除隊になるまで辛抱して頂きたい。其の時は君達の宿願の叶へらるゝやう微力を盡す事を約束して置きます。

K君。

先便君から頂いた令兄戦死の悲報の中に懸案中の戀愛問題に一言も觸れられ

なかつたのは思慮が深いと思います。實は其の時は長らく貴意を得て居ませんでした。或は思ひ切られたのではないかと思つて居ました。勿論私もお悔み状の中では其の事には觸れなかつたのでした。所が突然A子が君との間の話が進展しないのに業をにやして轉住の手續を執つて居るといふ君からの報せを受けて驚きました。そして是が非でも彼女が轉住する前に両親に申し入れて許諾を得、其の上彼の女の方に交渉して許婚式までの運びにして貰ひたいといふ君からの督促を飛行郵便で受けて少からず狼狽しました。斯く驚いたり狼狽したりして居る中に不圖或る疑問が浮んで來たのでした。打ち開けて申し上げて氣を悪くされては困りますが、實は轉住課へ行つて彼の女の轉住手續がほんとに行はれて居るかどうか調べて見ました。ほんとうでした。

勿論「お約束を御履行下さい」と言はれる意味は、令兄が除隊になるまで君達が待てば君の願望が叶ふやう微力を盡すと言つた言葉を促へられたのでしよう。そして令兄が遂に異國の土に血肉を吸はせてしまつた今日君の結婚の最大障害はなくなつた。君が私に約束の履行を迫られる理由のない事はありません。併しながら聰明で孝行者で、そしてあれ程頼りにして居た子息を失はれた悲しみで一杯になつて居られる今の御両親に、其の不幸を待つて居ましたとばかりに乗り出して行くやうに誤解され易い事は此の場合私には出來さうもない。實を言へば私自身も君の申し出に或る淺ましさを感じて居る位ですから。

A子も矢張り二世ですが、どうしたものか二世は相當の年輩になれば收容所生活をしたがらない。君達が居られた頃と違つて本收容所は目立つて老人と子供の國になつて居ます。若い男女は競つて職を求め或は友を求めて柵のない、親の監視の届かない、大戦がなかつたら想像もして居なかつたであらう遠い土地に轉住してしまふのです。A子位の年輩の二世は此處では珍らしい程です。A子が今までに轉住しなかつたのが不思議な位です。

誇張も確かにあると思ひますが、轉住した多くの若き男女が求めて居たものは自由であつたが得たものは墮落であるといふ情報が頻りに來るのです。立退令が我々に對して犯した數多の罪の中で斯く我々の若き者を誤らしめ我々の家庭を破壊した罪が最も大なるものではないでせうか。私はA子が頼つて行くと云ふ友なる人が餘程確かり者であつて善き指導者であつて呉れる事を祈るのです。私は又君自身の昨今の思想的傾向が氣懸りです。國歩の困難なる事有史以來今日如きはない時、若い者は多く懷疑的となり捨鉢となりたがるものです。其の上君の今の職業は一步を誤れば國を賣り民族を賣る結果を生み易いのです。確固たる信念のない者が轉落するに易き今日より甚だしい時はありません。どうぞ誤つても汚名を残す如き行動を慎まれん事を祈つて居ます。

序ながら轉住課で調べた時偶然發見したA子の轉住先は、ワイラデルフーヤ君の居られる都市だつた事を報告します。或は君の方から私にそれを報告すべきを、お忘れになつたのかも知れないと思ひますけれど。

(終)

編輯後記

加州を訪問して

去る廿一日、私は加州リヴァーサイドを訪れた。千九百四十二年三月十三日、米國官憲護衛の下に私達父子は他の同胞諸氏と共に、貳拾々年住み馴れた第二の故郷とも云ふべき地を後にしてから、足掛け四年振である。

山や野の姿は変わらず、嘗ての友は昔のままであつたが、戦争といふ惨酷なる事實は人々の心を変へさせて了つて、嘗ての安住の地も今はさうではない事を發見した。

立派な住宅と戦時景氣で收入の多いオレング畑を有つてゐられるリアルトの倉田一家や、四年振で我家に還つた歡喜に浸り乍ら、ポストンから持ち歸つた沙漠の草木を移植して、その成長を楽しんでゐられる西本一家や平田一

家のやうな加州歸還の先登を切られた人々もあるが、「君達の歸還を大いに歡迎したいが、併し還つて来ても、住宅や仕事口を求める事、新しい事業を始めめる事、それが最も困難な現在の情勢である。だから、出所には慎重を期してくれ給へ」と舊友である一白人が忠告してくれたやうに、家もなければ財もない私達のやうな者——轉住所民の^{エバキユイー}最多數者は同じ境遇であらう——に對しては、W R A が生命に對する有効適切なる保護と、生活不安を除去する爲の經濟的援助にもつと積極的に乗出さなければ、加州歸還は甚だ困難であらう。ストーアへ買物に行つて戦前同様歡迎してくれたら、各地方の公人、私人が公式的に歡迎すると云つてくれても、生命に對する不安が除かれず、そして生活の保証が伴はなければ、結局我々エバキユイーはどうにもならないのである。

○五月号は表紙、内容共に好評を博したが、特に久留島氏の「ポストン繪物語」は一般から絶讃された。「一幅の繪は千言に優る」といふ支那の古諺の如く、轉住所生活を再現して誌上に躍動させるもの、それは言葉ではなくして、繪であり、寫真である。その意味に於て今月号は「寫真特輯号」とした。

球王の如き藝術寫真、表紙、口繪等九点の力作は藝術寫真家として、世界的令名高き、進藤虎龍（舟水）氏と、愛弟子新進寫真家小坂芳雄

美製品



大里へるま
たを 寶子
US 免甲子

第16号の

寶子

このまは、一、二、三、五。

羅付特油蔵造会社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO

氏の共同製作になるものである。本誌に斯くも立派な作品の發表を御使諾下さつた両氏に對し、深甚なる感謝の意を表したい。

尚、愛讀者諸賢の要望に従つて、今後にも引續き轉住所生活を紀念すべき、繪と寫真を掲載したいと思つてゐる。

○五月六日夕、第三野外劇場で「聯合詩吟大會」が催され、場内溢るゝばかりの聴衆が、二時間以上に亘る詩吟を極めて靜肅に聽いて居たが、誠に氣持のよい催しであつた。

○最近東部へ再轉住された本誌寄稿家大岡隆一（周洋）氏、板谷金市（深田敬）氏並びに前主幹矢形溪山氏より皆様へ宜敷との御便りを頂きました。

○毎號製本の際に御來援下さる世數名の方々及び種々御世話下さる第卅二メスホールの御一同に對し深甚なる謝意を表します。

○リバサイド滞在中、リアルトの倉田家の人々には一方ならぬ御世話になりました。又、平田、中村、塩崎、西本、濱久諸氏にも種々御配慮を煩はしました。茲に厚く感謝の意を表します。(N.M)

ポスト文藝

第參卷第大號
一九四五六月號

本号特價二十五仙

編輯人	松原信雄
同	有田百
同	島原潮風
同	重富初枝
印刷所	ポスト印刷所

發行 **ポスト文藝協會**

(総政部内)

POSTON POETRY CLUB
UNIT I, CITY HALL,
POSTON, ARIZ.

Vol. 3, no. 6
June 1945

POSTON POETRY CLUB

UNIT 1, CITY HALL,
POSTON, ARIZ.